

私の人生と朝鮮語遍歴

熊谷明泰

はじめに

70歳で退職するにあたり、記念随筆の執筆依頼を受けた。私はこれを機会に、これまで朝鮮語と関わってきた自分自身の歩みを記憶の糸をたどりながら書き遺しておきたい。貴重な紙面を割いて個人的な話を書き連ねるわがままを、お許しいただきたい。

いざ書こうとすると、とても文字にできないこともあれこれ思い浮かぶ。だから、当たり障りなく書かれた文章だとの批評を受けるかもしれない。しかし、この機会を逸すると今後このようなおおよけの場で私個人の歩みを書くことはないと思うので、気おくれしながらも筆をすすめることにした。なお、敬称・敬語使用にばらつきが見られるかも知れないが、なんら他意がないことを御了解いただきたい。

I 少年期から高校生時代

私は5人兄弟の末っ子として生まれた。一番上の姉和子は私が生まれる前にすでに亡くなっており、男ばかり4人兄弟の末っ子として平凡な少年時代を過ごした。

大阪市立堀川小学校を卒業し、大阪市立北陵中学に入学した私は剣道部に属し、また地元の天満警察署で警察官から手ほどきを受けた。夕方、道場での練習中、警察官たちがドドッと一斉に駆け出していったことがあった。高校生になって扇町公園での集会・デモに行くようになって、あれは所轄内のデモ規制に出動した瞬間だったことに思い至った。もともと私は、スポーツはまったく不得手な人間だが、それでも少年期を振り返るとき、触れておきたいことの一つである。防具の汗臭さは、今も鼻の奥底にしみついている。私は特に目立ったところもない、いわば平凡なこどもだった。

桃山学院高校に入学した当初、しばらく点字サークルに属したが、三日坊主に終わった。2年生になると、日韓条約反対のデモに出て夜遅く帰るようになり、「またデモ行ってたんか！」と親に叱られていた。集会場では「朴にやるなら僕にくれ」というプラカードも掲げられ、今にして思えば、よくもまあと思う。当時、私は日共系の青年組織（民青）に所属し、私たちの高校で組織された高校生班だけで70～80名のデモ隊が組めるほどの動員力を誇っていた。扇

町公園の集会会場で同じ高校の労組の先生方が一緒に隊列を組もうと、嬉しそうに私達を誘ってきたこともあった。私たちの指導部だった日共地区党の人の部屋に行ったことがあったが、読まれた形跡もない大月書店のレーニン全集が畳の上に並べてあるだけで、いやに非文化的なおいと、貧しい「革命家」的な殺風景さを感じたものだった。

また、7、8人で日朝協会桃山学院高校生班を組織し、ささやかな活動をしていた。日朝協会大阪府連事務局に行く用事があり、事務局長だった故堀江壮一さんから何度かお話を伺ったことがある。堀江さんは、戦後メシが食えない時期に在日朝鮮人たちから助けられたエピソードを、どんなに苦しくとも闘える「革命的楽観主義」ということばとともに話してくれた。後日、堀江さんはこのことを次のように述べている。「戦後になりまして、闘いの中で朝鮮人との関わりは当然大きくなり、日本共産党にしても、朝鮮人から協力を受けているし、特に戦後の非合法活動をやった時は、朝鮮人に非常に世話になりました。私たちは金がなくて、コッペパンを食べていましたが、朝鮮人の家に行ったら、「お前、めしを食べたか」と、アルミニウムの入れ物にめしを、てんこもりにして食べさせてくれました」（『日朝友好連帯運動をかえり見て（1980年11月20日 日朝連帯外大集会）』『安全靴』と本—堀江壮一を偲ぶ』所収、135頁、1986年）。私は、筋金入りの共産主義者というものを、堀江さんの姿を通して初めて知った。

堀江さんは旧制高知高校で社研の活動をし、反戦ビラを貼って検挙され高知高校を追われた。その後、全協の活動家、日共党员として活動し、監獄を出入りしながらも非転向を貫いた。79歳のとき（1985年）に不慮の交通事故で亡くなるまで、留置・未決拘留・服役を合わせて20年余り獄舎に囚われた。戦後、宮城刑務所から出獄したときの様子を、堀江さんは次のように語っている。「コミンテルンの一支部の日本共産党の中に、中国、朝鮮の独立というスローガンがありました。このスローガンにもとづいて、朝鮮の独立という問題をかかげて、朝鮮人諸君と一緒に闘いました。そのうち、敗戦になります。私の経験では、1945年10月10日の政治犯の釈放の時、私は仙台ですが、まず誰が迎えにきてくれたかという、仙台の朝鮮人諸君でした。そして、その日、新鮮な魚を御馳走になって大変感激して帰ってきたというのを今も鮮明に覚えております。」（同上書）

府中刑務所内の東京予防拘禁所から徳田球一、志賀義雄、山辺健太郎、西沢隆二、金天海、李康勲ら16人の政治犯が出獄したときも、出迎えた人々の多くは朝鮮人だった。その前後の経緯は『占領戦後史』（竹前栄治、双柿舎、1980年）や「1945年10月10日「政治犯釈放」」（井上學、『三田学会雑誌』105巻第4号、2013年1月）に詳しい。

府中に収監されていた松本一三は、出獄時の様子を「“出獄前後”十月十日の思い出」（日共機関紙「アカハタ」第69号、1946年1月13日付）で次のように書いている。

「鉄門がひらく。われわれは大きなアカハタを先頭にして人垣のあいだを通りぬけ、灰色のコンクリート塀の前に設けられた演壇の前にならんだ同志キン・トウヨウ（金斗鎔）の

歓迎の辞にこたえて、同志トクダ（徳田）が、われわれ一同を代表してまず演壇へのぼった。瞬間、怒涛のような拍手と歓声の爆発である。……最後に同志キン・テンカイ（金天海）が登壇した。今度は朝鮮語の歓声の嵐である。同志キンは、やせた長身を少し前こごみにしながら雄弁をふるった。出迎えにきた四百名をこえる朝鮮の同志たちは、やつれて蒼白な同志キンの顔を感じにみちた眸^{ひとみ}でみつめていた。同志キンが降壇すると、ただちにデモに移った。出迎者たちの胸にたぎりたつ興奮と感動をそのまま解散することをゆるさなかったのである」（『占領戦後史』、149-150頁）。

この日に行われた「(自由戦士歓迎人民大会の) 会場には赤旗、太極旗が立ちならび……(米紙の) カメラマンが撮影したデモの光景に赤旗と太極旗がくっきり映し出されているが、これは、まさに誰が政治^マ[犯] 釈放運動の主体であったかを知るうえできわめて象徴的である」(同上書、151-152頁)と記録されている。なお、この頃2,465名の政治犯が釈放されている。

のちに、日共が堀江さんを除名(1966年)したことに関し、上記追悼文集には「戦前非転向で通し、戦後も転向した日本共産党に対して、非転向を貫いた同志が、又一人去った、共産主義運動の「冬の時代」に」と書いた文も載っている。1966年当時、日共機関紙「赤旗」の紙面ではラジオ・テレビ番組欄が拡充され、スポーツ面が掲載され始めた。その一方、「マルクス」「レーニン」といった語彙が紙面から消えた。大衆路線に転換したためだと説明されたが、私は「前衛党」の機関紙が「ブル新」のように改変されたことに疑問を感じ、理論的な解説記事がなくなった「赤旗」に失望していた。

高校2年1学期のとき(1965年)、1年先輩の坂本悠一氏(元九州国際大学教授)から「俺についてこい」と言われて、連れていかれたところが「日朝友好高校生合同文化祭実行委員会」(「合文祭」)の会議場だった。そこには、何人かの日本人高校生と、大阪朝鮮高級学校や当時「中立系」だった建国高校の朝鮮人高校生ら10数人が集まっていた。また、日本学校に通う朝鮮人高校生の団体からも、若干の生徒が加わっていた。なぜか私はその場で「第3期の実行委員長をやれ」といきなり言われ、それから1年間、この文化祭典の準備のために駆け回ることになった。当時、大阪府下の高校生運動には、高校部落研の連合体、各高校生徒自治会の連合体(「自治懇」と呼んでいた)、それに「合文祭」実行委員会があり、いずれも民青系がヘゲモニーを掌握しようとしていた。この流れの中で、私が実行委員長に推されたのかもしれない。

あるとき、「合文祭」実行委員会会議を開いていた場に、どこで知ったのか、いきなり韓国系の金剛学園高校生徒会の会長らがやってきて、自分たちも一緒にやりたいといった。そして「日朝」を「日韓」に変えることが前提だと主張した。明らかに分断破壊工作だと判断し、かなり厳しいやり取りのすえ、彼らを追い払った。

1年後開催される「合文祭」の前に、中之島公園で200～300人の比較的小規模な日朝高校生交流会をやったことがある。その時、遠くの方から駆け寄ってきて、うれしそうに私に抱きつ

いた男がいた。中学のクラスメートだった。彼が在日朝鮮人であること、そして建国高校に通っていることをこの時初めて知った。

上六の教組地方本部が入っていたビルの1階ロビーでしばしば会議が持たれ、朝高生たち（朝青大阪朝高支部対外部所属）とも親しくなった。そんなある日、近鉄上六駅から奈良の自宅に帰る朝高生の鄭さんが、ホームで「アンニョン！」（さようなら）と優しくあいさつをしてくれたのが、私にとって懐かしい朝鮮語の初体験だ。さざ波を身にまとったような朝高生のチマ・チョゴリの制服は、清楚で魅力的だった。

在日本朝鮮青年同盟（朝青）の大会に日本人高校生代表として招かれ、目がくらむほどライトがまばゆい舞台上でスピーチをしたり、私の活動が実名入りで、2度にわたりピョンヤン放送で報道されたりもした。このことが「災い」したのか、大阪外大に入学したあと韓国への観光ビザ申請をしたとき、翌日出るはずのビザが発給されず、1か月後に大阪の韓国領事館から呼び出された。副領事室に通され、かなり長時間しぼられた。「あなたはアカですね」が副領事の第一声だった。「どこで調べたのか」と聞くと、彼は「そんなことは答える必要はない」と突っぱねた。副領事はさんざん朝日新聞の悪口も言ったが、大学の学生運動に関する話題は一切出なかった。結局、その翌日にビザは出たが訪韓しなかった。あとでふれるように、私が初めて韓国に行ったのは大阪府大2年生の夏（1969年）のことだったが、このときはすんなりビザが出ていた。

「合文祭」実行委員長になって1年後、中之島の中央公会堂大集会室で、大阪府下約100校から千人以上の高校生が集まった文化祭典を終えた。文化祭典当日、すぐ上の兄が会場にやってくる、オヤジからのカンパだといってお金を置いて行ってくれた。

文化祭典が終了し実行委員会の引継ぎが終わると、運動に没頭していた私に父はしびれを切らしたかのように、夏休みの間、鳥取の叔父のもとに私を送った。運動から距離を置き、大学受験に備えることを望んだのだった。夏の終わり、大阪に戻るため国鉄鳥取駅に行ったとき、朝鮮総連支部ののぼりを立て、帰国事業で「帰国」する人を見送る人々を目にし、現実に引き戻された。私もこの運動で知り合った朝高生がたった一人で北朝鮮に「帰国」するのを大阪駅のホームで見送ったことがあった。私よりずっと小柄な子だった。彼女のおばあちゃんも見送りに来ていた。おばあちゃんは私の手を握り、「社会主義建設のために国に帰りたいというから……」と言ったあと、「来てくれてありがとう。ありがとう。もう孫と会えないかも知れない」と悲痛なことばを口にした。私は何も言えなかった。

運動をやっていた間に、私の学業成績は底を突いていた。しかし、この1年間の経験は、私の生き方、物の見方の基本を形作ったように思う。私と朝鮮との間に橋渡しをした坂本悠一さんは大学を退職した後、鬱陵島から竹島行きの船に乗ろうと試み、韓国の官憲に阻止されながらも、なおも船のタラップにしがみついている写真を、この文を書きながらネットで見つけた。

高校2年生のとき朝鮮語を勉強してみようと思い、大阪では一番大きかった梅田の旭屋書店

に行った。朝鮮語の学習書は2冊だけ並んでいたが、在日朝鮮人の書いた『朝鮮語の入門』（卓熹銖著、学友書房、1957年）を一冊買って帰った。ほんの少し独習した。そのあと、宋枝学の『朝鮮語小辞典』（大学書林、1962年）を頼りに、いざ原書を読もうと北朝鮮の社会科学の本を開いてみたが、全く歯が立たなかった。この朝鮮語学習書には、ひげもじゃ中年男の口の周辺だけを撮った何枚かの写真が印刷された紙が挟み込まれていた。きたならしく思え、じっくり見られる代物ではなかった。朝鮮語が飯のタネになる時代ではなく、この学習書もへんに学習者に媚を売らない硬派のものだった。

当時、よく読まれた本に『日・朝・中三国人民 連帯の歴史と理論』（安藤彦太郎・寺尾五郎・宮田節子・吉岡吉典共著、日本朝鮮研究所、1965年）がある。朝鮮植民地支配に関する資料もたくさん載せられており、高校生だった私も多くを学んだ。この本の「はじめに」には、朝鮮研究所訪朝代表団が北朝鮮の高官から聞かされた、次のような話が紹介されている。

「……子供の時というものは歌の好きなものです。私も好きでした。しょっちゅう歌ってました。もちろんみんな日本語の歌です。その中でも私が一番好きだった歌は『兎、追いし、あゝ山、小鮒つりしあゝ川……』という、あれは唱歌というのですか、童謡というのですか、あれが一番好きでした。だけれども、その日本の歌を日本語で歌っている時でも、幼な心にまぶたに思い浮べるのは、朝鮮の山であり、朝鮮の川であったのです。自分の国の山や川をまぶたに描きながらも、日本語の歌を歌うよりほかに仕方のない植民地の少年の悲しい思いが日本のみなさんがたにおわかりでしょうか？」

4.3事件（1948年）のとき、南労党に対する韓国国軍と反共民間右翼の武力鎮圧から逃れるため、済州島から密航してきた金時鐘（キム・シジョン。詩人）氏も、‘幼いころを追憶すると、「夕焼け小焼けの赤とんぼ……」のメロディーが思い浮かぶ。けれど、今となってはそれを朝鮮の童謡に置きかえることはできないのです’と語っている。

植民地統治下で「皇国臣民」として異民族である天皇に忠誠を誓わされ、日本語を「国語」として生きることを強要された朝鮮民族は、8.15解放以後、朝鮮民族としての自らのアイデンティティを確立するための歴史を歩んできた。それから70年以上経った今日、なお慰安婦問題、徴用工問題が引き起こされるのは、日本から脱却し、日本に対峙して今なお民族的アイデンティティを確立しようとする集団的心理が働いているからである。

また、韓国国内で今なお「親日派」（植民地統治に積極的に協力した人やその子孫）に対する報復、植民地統治が朝鮮社会の近代化を促進したと主張する「植民地近代化論」者に対する抑圧が続いているのは、民族的アイデンティティ確立に不安感を抱いているためだろう。韓国社会は民族的アイデンティティに関しては、全体主義社会の様相を呈している。

話しを戻すが、高校のクラスメートに、在日朝鮮人に違いないと思える人がいた。彼は野球

部でセンターの名手だった。朝鮮語をほんの少しだけかじった私は、隣に座っていた彼に「おまえの名前、ほんまは‘ハクサム’やろ？」と悪気なく小声で言った。瞬間、彼はかたまってしまった。彼の名前の漢字を朝鮮語音で読んで得意になっていた私は、触れられたくないことで不用意に彼を傷つけてしまったのだった。

兄はみな大学に進んでいたのだから、進学するのがあたり前に思えたのは幸せなことだった。高校2年生になってからは学校の勉強に身が入らず、早々と浪人をすればいいと高をくくって過ごした。当時、4年制大学進学率は男20%、女5%（男女全体で13%）の時代だった。

浪人時代はYMCAの経営する予備校に通った。あのころは予備校にも「難関校」があり、合格発表の掲示板の前で泣いている子もいた。80人くらいのクラスだったが、休み時間に政治演説をする3、4人のクラスメートがいた。反帝高協（中核派系の高校生組織）で活動し10.8羽田闘争で犠牲になった山崎博昭氏（当時、京大文学部1年）と大手前高校での同級生で、山崎の遺志を継ぐのだと熱く語っていた。数か月後、その決意通り彼らは大学生になってデモに出て来ていた。高校生のとき、桃山学院高校に反帝高協のメンバーがオルグに来たことがあったが、政治的にも狭量な私たちは、ろくに話を聞くこともなく冷たく追い返した。

II. 大阪府立大学時代

1浪後、同志社大学政治学科を受験したとき、「哲学研究会」のメンバーだと名乗る学生が試験会場の教室に入ってきて、ひとしきりアジテーションをぶって出て行った。なかなか力のこもった演説だった。そんなこともあって同志社大学にも魅力を感じて少し迷ったが、関西学院大学政治学科に入学金を払った。窓口の手を差し入れて入学金を支払ったとき、その後入学を辞退しても返してくれないのは納得できないなあと思った。結局、授業料の安い大阪府立大学に進んだ。

家の近くにある天神橋筋商店街2丁目の靴屋さんで、生まれて初めて1週間ほどアルバイトをし、賃金をもらった。入学式の朝、生協に駆け込み、四角い段ボール箱に5冊が詰まった『資本論』を買った。経済学部に入るのだから、まずはマルクス主義経済学の原典を、と想っていた。これが自分で稼いで買った最初の本だった。そのハードカバーの重厚感に魅惑され、宝物のように思えた。ソウルに留学するとき、一橋の院生研究室棟に当時もっていたほとんどの本を放置したままにしておいたのだが、やがてこの本も処分されてしまった。

学長は新入生に向けた祝辞で、「皆さんの中には不純な動機で入学してきた人もいると思うが、大学はそんなところではありません」と言い切った時、思わず涙がこみ上げた。いろいろ思索した挙句、不本意にも朝鮮語専攻をあきらめた後だったからだ。就職率を競い合う今どきの大学では、学長が入学式でこんなことを言うと、批難の矢面に立たされるに違いない。

1年生の前期だけは人並みに講義に出席した。「国語学概論」や「経済学史」、「西洋思想史」、

「経済学原書講読」などの授業はとても魅力的だった。入学して最初に受けた授業は英語だったが、予備校の高先生がいきなり教室に現れたのには驚いた。いつも満面に笑みをたたえる先生だったが、大学では違っていた。英語の授業が予備校よりも低レベルに思えたのも、不可思議なことだった。

大阪府大では当時、第2外国語はドイツ語、フランス語、ロシア語のうちから1つ選ぶことになっており、私はドイツ語を履修した。それから20年もあと、韓国外国語大学に勤務している時、社会人対象の社会教育院でドイツ語の夜間授業を特別に聴講させていただいた。

大阪府大でも朝鮮語は開講されていなかったの、仕方なく入学後すぐに、当時上八にあった大阪外大で朝鮮語学科の学生や卒業生が教える「朝鮮語市民講座」に1年間通った。その教室は、朝鮮語学科の授業が行われる「ウナギの寝床」と呼ばれていた横長の「A8教室」だった。これで少しだけ読めるようになった。この市民講座の十数名の「同期生」の中には、のちに朝鮮文学研究者となった三枝壽勝氏（東京外大名誉教授）や対馬宗家文庫研究者の泉澄一氏（関西大学名誉教授）もいた。本学文学部に赴任したとき、泉教授と研究室が隣同士になったのは奇遇だった。当時、このお二人は高校の先生をしておられたように記憶している。また、在日朝鮮人の受講生も複数人いた。そのうちの一人に誘われて生野（猪飼野）の御自宅に伺ったことがある。おばあちゃんがいたが、日本語がよく分からなかった。彼は「おばあちゃんはテレビを見ているけど、分かっているのかなあ」といぶかっていた。猪飼野は朝鮮語だけでも暮らせる町だった。その後、私は猪飼野に6か月ほど暮らしたことがある。あのころ、朝鮮語を学ぶ人々は、歌や踊りなど気軽な関心から始める人は少なく、「硬派」的思考を持つ少数精鋭だったように思う。

大阪府大に入学して、「朝鮮文化研究会」の部室を訪ねた。会員は、私以外はみな在日朝鮮人だった。しばらくして、道頓堀の朝鮮料理屋（明月館）で朝文研の新生歓迎行事があるので、先輩たちにつれられて行った。料理屋の2階が会場になっていて、京阪神地域の70名とか80名の大学生でぎっしりだった。会場に着くまで知らなかったのだが、それは朝鮮総連傘下の在日朝鮮留学生同盟（留学同）が主催する新生歓迎会だった。会場では歌も歌われた。君も歌えと指名されたので、私はマイクを持って、高校生のときにおぼえた「ネナラ（わが国）」という北朝鮮の歌を歌った。「山麗しく水清き美しきわが国、ここが私が生まれ育っているところ、栄えある労働で暮らしが花開く、社会主義の新しい日を手繰り寄せよう（산 좋고 물 맑은 아름다운 내 나라, 여기 내가 태어났고 자라나는 곳, 영예로운 노동으로 생활이 꽃피네, 사회주의 새 날을 당겨 온다네）」という、流れるように美しいメロディーの曲だ。

ずっと後のことだが、2000年6月13日から6月20日まで、「北東アジア経済協力に関する金森委員会訪朝団」に随行して北朝鮮を訪問した。この訪朝団は日本政府のミッションとして派遣されたものだった。「滅多なことでは拘束されない。自由にやりたいことをしなさい」と、団員のひとりが私に助言してくれた。随行した大学の研究者は、木宮正史氏（東京大学教授）

など私を含めて4人だった。木宮氏は、いつもビデオを撮り続けていた。

北朝鮮側の案内人に頼んでピョンヤン市内のカラオケに行ったとき、この「ネナラ (わが国)」が歌いたくなかった。しかし、選曲できなかった。ソファーに対座していた女性従業員に聞いても、そんな歌は知らないと言った。どうしたことだろうか、今も不思議である。このたびネットを検索してみたら、歌詞の一部が「首領様の愛のもと幸せは花咲き (수령님 사랑 속에 행복은 꽃피어)」とか「偉大な首領様に千年万年お仕えし (위대한 수령님을 천만년 모시고)」に変わっているのを知った。このときのことは、本学「人権問題研究室室報」第26号(2001年1月)に「北朝鮮紀行」のタイトルで書いておいた。

高校生の時、よく歌われていた「若者よ」が急に禁止曲になった。作詞者の「ぬやまひろし」(本名：西沢隆二)が日共を除名(1966年10月)されたためだった。「若者よ体をきたえておけ 美しい心がたくましい体からくも 支えられる日がいつかは来る その日のために体をきたえておけ 若者よ」などとお説教たっぷりのふやけた歌詞を、この肅清劇とは関係なく、しらじらしく思っていた。作り笑顔の「うたごえ運動」、あのわざとらしい振る舞いにもついて行けなかった。

話を戻すが、朝鮮文化研究会の先輩たちは、私が通名を名乗る在日朝鮮人だと思ったようだった。しかし、私はそんな嘘は一度も口にしたことはなかった。同期入学の金哲雄(キム・チョルン)君(大阪経済法科大学教授)と親しくなり、部室前のサツキの花咲く芝生で、「偉大な首領金日成同志の革命思想で社会全体を一色に染めるため、身を捧げて闘わなければならない」などという「党の唯一思想体系確立の10大原則」(1974年)を、朗読しながら読み合わせたこともあった。当時、朝鮮文字が読める日本人大学生は珍しかった。

1年後、先輩が「わかっているだろう」と言いながら私に退部を促した。朝文研は、学内サークルを装った留学同のフラクションだったからだ。朝文研の先輩たちの中にも大学教員になった人々がいた。ある先輩は祖国には石炭が豊富だから、石炭の研究をすると話していた。また、ある友人は、祖国は第三世界諸国との友好交流が大切だからと、スペイン語学科に進学した。そんな先輩や友人たちから、「祖国」の発展に寄与できる人生を歩もうとする心意気を感じた。「地上の楽園」の実情もよくわからないまま、多くの在日朝鮮人が北朝鮮に未来への夢を託した、そんな時代だった。

私は1年生の秋から授業に欠席するようになり、1年間ほとんど学校に行かない時期もあった。そんな私を心配して、同期入学の鳥津君は学年末試験の前になると、頼みもしていないのに、各科目の出題予想を小さな文字でぎっしり書いたはがきを2年続けて送ってくれた。彼の好意には応えられなかったが、その心の優しさに随分と慰められた。

私の20歳の誕生日すなわち1968年11月22日、私は日共系の拠点だった東大教育学部構内にいた。いま思えば恥ずかしいことだが、全共闘・新左翼の全学バリケード封鎖を阻止するための部隊に動員されていた。昼間は平服姿で「東大生のふりをしてくれ」と言われた。その日

は、新左翼内部の方針不一致で全学封鎖は行われなかった。引き上げることになった夜、大阪府大の学生だけで集まり丸く輪になって歌ったのは、あろうことか「校歌」だったのには、おったまげた。黄色のヘルメットを「安全帽」、ゲバ棒（角材）を「民主化棒」と呼び変え、ひとえに全共闘・新左翼に対してだけは戦闘的だった。新左翼が政治闘争にひた走っている時、民青系全学連は「トイレにトイレトペーパーを置け」などという、大衆迎合的な「諸要求貫徹」を主要な運動方針の一つに掲げていた。

11.22のあと、大阪府大で関西ブント（共産同）のリーダー格だった先輩から、「お前らは女に握らせたおにぎり喰ってたんだろ。俺らはパンかじってたんだぞ」と嫌味を言われた。そのとき、この先輩が言いたいことが理解できるようになっていた。

大阪府大の関西ブントのメンバーのうち複数人が逮捕され大学を中退したが、赤軍派の「前段階武装蜂起」を唱えていたこのリーダー格の先輩は逮捕されることもなく、のちに私立大学の教授になった。

大学入学後10か月ほど経って、日共にたいして私は強く疑問を抱き始めた。「弾圧から琉球政府行政の屋良主席を守るため」という理由で、沖縄で準備されていた史上空前のゼネスト（1969年の2.4ゼネスト）を直前に回避させたことは、私には日共などの既成左翼による議会主義的裏切りだとしか思えなかった。そして日共・民青は、より過激に闘う新左翼に対して「極左分子」「トロツキスト」「暴力集団」などとレッテル貼りをして「わるもの」扱いすることに余念がなかった。彼らはスターリニズムに毒され、食わず嫌いで「汚らしい」と思ったのかトロツキーの著作も読んではいなかった。日共・民青の議会主義的体質に嫌気がさして政治的立場を変えた私は、かつての仲間たちからひどく憎まれた。政治組織の不気味さ、怖さをつくづく思い知らされ、それ以来私はいかなる党派からも常に一定の距離を置いて生きてきた。

1969年8月末、2週間の旅程で初めて韓国に行った。まず、博多港から釜山港行の貨客船アリラン号に乗った。安い船底では、船酔い客のためのひしゃげた金だらいが、船が揺れるたびにあちこちで音を立てて転がった。私は耐え切れずデッキに上がり、肌寒い潮風に打たれながら何かに必死にしがみついていた。私が渡韓した1969年度の訪韓者は38,351人だった。ちなみに、日韓国交回復をした1965年度は5,111人、1966年度は16,873人、1967年度は19,740人、1968年は25,219人で、その多くは在日朝鮮人だった。このように1960年代には韓国を訪問する日本人は少なく、菅野裕臣氏（東京外大名誉教授）は1968年にアリラン号で初めて訪韓した時のことを「百孫朝鮮語学談義—菅野裕臣の乱文乱筆 1968-72年 2つの韓国留学記」に興味深く書いているが、その時日本人客は菅野氏1人だけだったという。

船には「ポッターリチャンサ」（ポッターリは風呂敷包み、チャンサは商人）の在日朝鮮人が何人も乗っていた。日本の品物を手荷物で持って行って韓国で売りさばき、韓国の品物を持ち帰って日本で売って利ざやを稼ぐ闇商人だ。釜山で下船するとき、知らないおじさんに10本ほどの黒いこうもり傘の束を持ってくれと頼まれたが、やばいことに巻き込まれるのも嫌だから断った。

韓国に入国して、まず郵便局に行った。在日朝鮮人の知人から、釜山に着いたら済州島の親戚に送ってほしいと頼まれたカメラを郵送するためだった。包装していると、見知らぬ男が「そのカメラ売ってくれ」と声をかけてきたが、もちろん無視をした。事前に宿の手配などしていなかったが、釜山で旅館を探してひとまず落ち着いた。

ひとり喫茶店で手紙を書いていると、ガム売りのこどもが次々とやって来た。2、3人から買ったが、そのあとにやって来た女の子に「いくら？」と聞いたら、前の子の倍の値段を言った。「高いよ、○ウォンだろ？」という、その女の子は一瞬息をつまらせたような顔をし、うなだれて店を出て行った。私は罪悪感にさいなまれた。『ユンボギの日記』の世界が残っていた。

そのあと、一番大きな書店に行き、難しそうなお本を見ている学生風の男に話しかけてみた。そういう人間には悪い奴はいないだろうと思ったからだ。彼は家に来ないかと誘ってくれた。彼は浪人中の身で、父親は釜山水産大学の学長だった。父親が彼の部屋に入って来たとき、あわてて手を振りまわして空中を漂うたばこの煙を散らそうとした。臭いまでは消せないのにと考えたが、年長者の前ではタバコを吸わない礼を守るために、紫煙を掻き消そうとしたのかも知れない。

彼は毎朝私の宿を訪ねてきてくれた。3日間ほど一緒に釜山を見て歩いてから、ソウルに行った。ソウルでは「鍾路禮式場」(結婚式場)の裏にあった旅館に入った。これは朝鮮語市民講座で一緒に勉強をしていた李清三氏から教えられたところだった。この旅館には、長男の陸士出身の職業軍人、梨花女子大に通う娘、仁荷工科大に通う息子の3人兄弟がいた。軍人の方は、なぜか私を東亜日報社本社に連れて行って人に紹介したり、軍事博物館を案内してくれたりした。当時、ソウル市街を走る車の交通量は少なく、軍の車が通りがかったとき、彼は握りこぶしの腕をさっと持ち上げた。するとその車は停止するのだった。彼の指には陸士のものと思われる大きな指輪がはめられていた。梨花女子大生の娘さんと話をしていたとき、「チャセンダン(資生堂)」の化粧品を送ってほしいと頼まれた。申し訳ないことに、この約束はいまだに果たしていない。仁荷工科大の息子とは親しく付き合った。当時、韓国の憲法では大統領は再選までしか認められていなかったが、朴正熙(パク・チョンヒ)大統領は憲法を変えて長期に政権を維持しようとしていた。在野勢力はこれに反対する闘争を展開していた。私がこの時期に訪韓した理由の一つは、この「三選改憲反対闘争」を自分の目で確かめたかったからだ。まず、東崇洞のソウル大学文理学部に行ってみたが、正門は官憲によって封鎖され、学生の出入りは禁止されていた。私は大学生のデモを見たいと仁荷工科大に通う息子に話したところ、その翌日、「あした東国大学に行け」とだけ話してくれた。彼はこの秘密の内部情報を聞き出して、私に教えてくれたのだった。東国大学キャンパスで様子をうかがっていたところ、いきなり3、4名の学生が一枚の紙を大声で読み上げた。するとそれを見た学生たちがわっと駆け寄り、互いに肩を組んだ隊列がキャンパスを2周、3周するうちに、2、3百人のデモ隊に膨れ上がった。そのあと、警察が阻止線を張る正門を突破しようとしたデモ隊に対して、教員たちが出るなど押し

とどめ、警察との衝突は起らなかった。日本では「何月何日の何時にどこどこで集会をやる」とビラや立て看やハンドマイクで宣伝しても、多くの学生から見向きもされないのが普通のことだった。一体これは何ということだと、私は激しく心を揺さぶられた。

関西大学構内に初めて足を踏み入れたのはたしか1971年冬のことだった。私はノンセクトだったが、文学部学生大会「防衛」のために動員された「外人部隊」の一員だった。第1学舎の2階につづく階段には火炎瓶がうず高く積みあげられ、緊張感が漂っていた。私は与えられた笛を首からぶら下げ、第一学舎裏手のうらびれた景色を眺めながら、一人でレポ役をやらされていた。幸いなことにその日は何事もなくすぎた。後日、法文坂あたりで2人の他大学の学生が内ゲバで亡くなったことを新聞で知った。京都大学の辻君とはさほど親しくはなかったが、焚き火を囲んで日韓法的地位協定に基づく在日朝鮮人の協定永住権申請問題のことをひとしきり話しあった思い出がある。味のある渋いひとだった。また、「命をかけて任務を完遂する」と思い詰めたように演説する同志社大学の正田氏の姿を目にしたことがある。そのとき、「危ないな」という不安がよぎった。それから30年近くあと本学に赴任した私は、研究室に向かって法文坂を歩きながら、若くして命を落とした彼らのことを何度も何度も思った。

猪突猛進型とはおよそ縁遠い臆病な私は、幸か不幸か検挙されることもケガをすることもなかった。だからこそ、大学の教員にもなれたのだろう。あの時代をまっしぐらに生きなかった後ろめたさは、いまでも拭い切れないままである。前で紹介した堀江壮一氏は、講演で次のように語っている。「私も皆さんの前に立つ資格はないような人間ですが、若干の闘いをやっております。何十年か経てこうして皆さんの前で壇上に立っておりますが、私は最近思います。「お前は一体どういう闘争をやったんだ、本当に敵に対して生命をかけて闘ったら生命がないはずだ」と自問します。」（『戦前・戦後の経験から—監獄内の弾圧反対闘争—（1976年7月10日救済会講演集より）』『安全靴』と本』127頁）。堀江氏のように生死の境目を生きぬいた人から見れば、無傷なまま職に就いた大学教員の左翼的言辞など、軽く思えて仕方がなかっただろう。

あのころは、大阪府大でも安田講堂や大菩薩峠で検挙され、「M作戦」でパくられた学生もいる、ささくれだった時代だった。1969年の夏だったか、関西ブント（赤軍派の源流）がバリケード封鎖された昭和町の桃山学院大学で屋内集会を開いた。演説をする者はみな目と口だけしか見えない異様な覆面姿で、「我々と行動を共にする同志は、この場に残ってほしい」と演説を締めくくった。私にはできないと思い、そそくさと抜け出した。

1985年9月のある日、ソウルで市内バスに乗っていたとき、がんがんと大音量で流されるラジオのニュースで、日航機「よど号」でピョンヤンに渡った吉田金太郎氏が亡くなったことを知った。私よりも背が低く、青白く痩せたきんちゃん（吉田氏の愛称）は、大阪府大にもちよくちよくやって来ていた。彼ははにかむように笑顔をみせる純真さを漂わせていた。その頃、労働災害でけがをして堺の造船所を休職中だったと思う。

「よど号」がハイジャックされていたころ（1970年4月上旬）、2人の刑事が私の所在を確認

しようと、両親の家の隣近所を聞きまわっていた。たまたま母が近所のお宅にいたとき刑事がやって来たので、わかったことだった。母は「それは私の息子です」といって刑事に聞いたところ、あなたの息子は手配中の大阪市大の学生をかくまっている疑いがあると、いい加減な言い訳でごまかした。「よど号」に誰が乗ったのか分からず、公安刑事たちがローラー作戦をかけて調べていたのだろう。実はこの2日ほど前、家の近くに男たちが乗った不審な乗用車がずっと止まっていると母から電話で知らされ、私はとり立てて身に覚えはなかったが、念のため身を潜めているときだった。ともかくも、私は逃亡中の学生をかくまってはいなかったし、いかなる政治組織にも正式には加わっていなかった。

吉田氏は病死したと北朝鮮当局は発表した。1970年代半ばにすでに亡くなっていたともいわれ、真相はわからない。生真面目な人だから、たくましく生き延びられなかったのかもしれない。

5回生のころだったか、1回生の時のクラス指導教員だった藤井定義先生と廊下で偶然出会った。そのとき、なぜか大学院のゼミに出てこないかと私を誘った。数人出席していたゼミでは町人学者山片蟠桃も取り上げられた。山片蟠桃の墓は私の両親の家のすぐそばにあり、それだけでも親しみを覚えた。そんなあるとき、藤井先生は「自分が研究者になったのは、同志社大学を卒業するとき、就職が上手くいかなかったので大学院に進んだからだ」と私に話してくれた。生きる方向性が定まらない私を歯がゆく思っていたのかもしれない。

プラトン研究者の山野耕治先生の研究室にもよくお邪魔していた。山野先生は「きみ、ラテン語をやらないか？丸善に行ってオックスフォードラテン語辞典を買ってきなさい」と私に勧めたことがある。しかしその時、私は朝鮮語をやるかと思っていた。大阪外大の授業にもぐりたいと思っていると話したところ、それではと、頼みもしないのに朝鮮語学科教授宛の推薦状を書いて渡してくれた。私はこの封書を持って大阪外大の朝鮮語研究室を訪ねたが、「あかん」の一言であえなく討ち死にをした。わずか15人定員の朝鮮語学科でのめぐり聴講（韓国では「盗講」という）など許されるはずもなかった。私の考えが甘かった。このことで、正規に受験して入学するしかないことと決断した。

ある時、大阪府大職員のOと名乗る男性が父の家を訪ねて来たそう。長期欠席の私のことで話がしたいということだった。しかし、その男は父に金の無心をして帰ったあと、金を返すこともなくぶつりと連絡が途絶えた。何をしに来たのかと父はあきれていた。

私は卒業したいあまり、恥ずかしいまねをしたことがある。必修科目の「線形代数」の学年末試験で単位を落しそうだったので、担当教授の研究室を訪ねたのだった。しかし、その教授は私に厳しく対応した。みっともないことをやらかしたことへの自己嫌悪、羞恥心で、その日は安ウイスキーで酔い潰れた。今も悔やまれる恥辱のひとつだ。結局、この科目を落としたために、卒業がさらに1年遅れた。

我が身可愛さに、卒業単位を揃えようと定期試験を受け、こそこそと卒業した私にとって卒

業は晴れ晴れしいものではなかった。5月になって卒業証書を受け取りに来るようにとの連絡があり、人目を避けるように事務室に出かけて行った。私は3年間留年を重ねたあと経済学部を卒業したが、学生運動に関わるなかで卒業しないまま大学を去った人もいた。彼らには合わせる顔もない。

大阪府大を卒業する頃、ある私立大学の図書館司書として就職しないかという誘いを受けたが、その気にはなれなかった。当時、私は桃山学院大学で夜間に行われた6か月間の司書講習に通い、司書補の資格を得ていた。

この司書講習では図書館市民運動が強調され、例えば犯罪捜査のために官憲が図書館利用者の図書貸し出し記録の提供を求めても、市民の思想信条の自由を守るために、決して利用者情報を国家権力に提供してはならないことも語られた。先日、大阪府立図書館（東大阪市所在）に行ったところ、利用者が借り出した本は、返却と同時にその貸出情報は消去されることが利用者案内に記されていることを知った。

ゼミの指導教授だった小島孝先生（海商法）は、「神田の古書籍店で丁稚奉公をして、将来本屋でもやらないか」と助言してくれた。およそ私には会社員など勤まらないと判断したうえでのことだと思った。小島ゼミでは独禁法がテーマだった。ゼミ生は私を含めて3人だったが、高橋君は新聞記者になり、竹内君は生保会社に入った。

小島先生は私が中国で在外研究に従事していたとき（2007年夏）に御老体を鞭打って中国においでになり、延吉から一緒に長白山（白頭山）の密林の間を小型バスに長時間揺られて、広開土王碑を見に行った。また、吉林省通化市にある抗日武装闘争の名高い指導者楊靖宇の記念館も訪ねた。

1975年3月、卒業できたことを話す私に、父は「ほんまか？」と何度も繰り返した。兄は「お前は末っ子だし、やりたいことをやればよい」と言ってくれた。

私が初めて大学に入学した1968年度の国公立大授業料は月1,000円で、大卒者初任給（月給）は約30,600円（政府統計）だった。学生寮で起居し、アルバイトをして親元に送金する奇様な学生がいるという噂話さえきこえる時代だった。私が卒業した1974年度の授業料は月3,000円で、当時の大卒者初任給（月給）は約75,000円だった。今の貨幣価値に換算すると、年間授業料が5万4千円（1968年度）や7万6千円（1974年度）に相当し、授業料だけに関して言えば、留年する負担は大きくなかった。とはいえ、私は経済的に常に親の世話になっていた。私が親からも国からもお金をもらわず、何とか経済的に自活したのは、韓国で日本語教員として就職してからだった。

Ⅲ. 大阪外大時代

26才になってやっと大阪府大を卒業するころ、私は朝鮮と関わる生き方がしたいと思い、まず

は大阪外大に入学することにした。これが、本格的に勉強をしようと思い立った最初のことだった。歴史学を専攻しようか、言語学を専攻しようか迷ったが、ともかくも基礎となる朝鮮語の勉強から始めようと思った。当時、朝鮮語専攻課程は大阪外大と天理大にしか設置されていなかったの、両方受験した。天理大入学試験の日、廊下で受験生が「俺はアタマが悪いから、朝鮮学科しか受けられへんや」と愚痴っていた。ぜんぜん分かってない奴らだなあと思い、「なに言ってるんや。朝鮮語やれるとこ、他にどこにあるんや」と論じた。そんなこと、彼らは今でも覚えているだろうか。当時、朝鮮語は他の外国語に比べて最も入りやすい学科だった。「なんで朝鮮語なんか、やるんや？」ということばが疑うことなく発せられる、まだそんな時代だった。大阪外大士入学試験の口頭面接試験では、塚本勲教授は「外国語試験の成績を見ると、君は英語科にも入れるのだけど、なぜ朝鮮語科に入りたいのか」と私に質問をした。合格しやすい穴場狙いで朝鮮語学科を受験したのか、あるいは本当に朝鮮語がやりたくて受験したのかを確かめたかったのだろう。

大阪外大の合格者発表は、天理大学の入学式の日と重なっていた。天理教の立派な本部神殿で、私は信者ではないが、見よう見まねで「おてふり」をしながら、「あし～きをはろ～て た～すけた～まえ てんり～お～(天理王)の み～こ～と」と唱えたりした後、大阪外大に電話で結果を問い合わせた。大阪外大の事務職員は「電話では教えられない。大学に来て掲示板で確認するように」といったが、事情を話すと特別に教えてくれた。すぐに天理大の事務室に行って入学を辞退したいと申し出たところ、事務室のみんなが拍手をしながら祝福してくれた。ありがたくもあり、また妙な気分だった。天理大学朝鮮学科は1925年に設立された天理外国語学校朝鮮語部を前身としており、朝鮮語教育研究では長い伝統を誇っている。

私のうしろの席で学士入学試験を受けていた名古屋大学の谷博之君はモンゴル語学科志望で、ロシア語で受験していた。不合格のあと、モンゴル語学科教授から「僅差で不合格になったが、再挑戦するように」との手紙をもらったとのことで、1年後に入学してきた。この谷博之君との出会いは、のちに私が一橋大学大学院に進学するきっかけとなった忘れ難い人である。谷君は入学したとき、文字学を勉強したいと言っていた。最近、2014年に亡くなっていたことを、谷君の同級生が書いた次の追悼文で知った。「谷君、あなたは、老子・荘子が好きでしたね。無理して偉くなろうとしない、成功しようとしたりしない。自分が納得するように頑張って、後は大宇宙の法則に委ねればそれで良しとされたのでしょうか?……さまざまな現実を、逆境も含めすべてを受入れる柔軟性をもちつつも、自分の思想的立場は決して変えない、良い意味での頑固者でした。その頑固さが我々凡人には到底理解できなかつたのかも知れませんが、今となってはそれを知るすべもありません。それが非常に残念です。」(『谷博之君を偲んで』『モンゴル研究』No.29・30、モンゴル研究会、2018年) 谷君はエスペラント語の普及に尽力し、「タニヒロユキ」の名で日本エスペラント図書刊行会から、『簡明日エス辞典』、『簡明エスペラント辞典』、『エスペラント単語練習帳』、『エスペラントとグローバル化：民際語とは何か』などを

出版した。追悼文はさらに「谷君、あなたは言語ヲタクで、世界のあらゆる言語に精通する、言語の天才でした。……人種・民族・国境を越えて、あらゆる人類と仲良くなろうとしていました。時には犬や猫も含めて、いわゆる、コスモポリタン、自由人でした。」と谷君を偲んでいる。お互いどんな人生を歩んで来たのか、もう一度、谷君と会って語り合いたかった。

大阪外大朝鮮語学科は1学年15人定員で、学生たちは和気あいあいとしていた。朝鮮語の授業を受け始めた最初の1週間は、教師が「ちょうせんごは……」と話すたびに、そのあまりのみずみずしさに私の体は電流に触れたかのように小刻みに震えつづけた。遠回りして朝鮮語の勉強を始めたのは、むしろよかったと思う。学生運動が盛んな時期に入学していたら、落ち着いて勉強することなく終っていたかも知れないからだ。

大阪外大に入学したころ（1975年）、関西圏で朝鮮語科目が開設されている大学は、他には天理大、京都大、神戸外大だけだったように思う。関西大学では1985年になって初めて、文学部に1科目だけ朝鮮語科目が開設されたと聞いている。本学だけで100クラスを越える朝鮮語クラスが開講される今日のような状況は、当時は想像すらできないことだった。

たしか1970年代末ごろ、大阪市大では学生たちによる朝鮮語科目開設を要求する署名運動が起こっていた。こうした動きを背景に、大阪外大朝鮮語学科教員は大阪市立大学長宛に朝鮮語科目開設要望書を作成し、これを学長に手渡すために、私は先生方について大阪市大まで行ったことがある。そうした結果、大阪市大に数コマの朝鮮語科目が開設された。これは、当時としては画期的なことだった。

当時、朝鮮語学科の何人かの学部生によって、朝鮮文学作品の輪読会が開かれていた。文学作品が「ななめ読み」できるかのような水野健氏はその中心メンバーで、蔡萬植（チェ・マンシク）の作品を好んで読んでいた。水野氏は「ハングル工房 綾瀬」という自らのホームページを運営し、朝鮮文学のことなどで辛口の批評を書いている。大学院生の頃には、小西敏夫氏（大阪大学准教授）や生越直樹氏（東京大学教授）らと、G.J.Ramstedt 著『A Korean Grammar』（1939年、Helsinki）の輪読会をやったこともあった。

大阪外大では、『捷解新語』など朝鮮資料も研究された濱田敦先生および安田章先生（ともに京都大学名誉教授）、アルタイ学者の江実先生（岡山大学名誉教授）および村山七郎先生（元九州大学教授）、西夏語研究者の西田龍雄先生（京都大学名誉教授）、シュメール語研究者の吉川守先生（広島大学名誉教授）、朝鮮考古学研究者の東湖先生（徳島大学名誉教授）らの集中講義を受けた。また、塚本勲先生、北嶋静江先生の講義をはじめ、近現代朝鮮史研究者の姜徳相（カン・ドクサン）先生（滋賀県立大学名誉教授）および井口和起先生（京都府立大学名誉教授）、朝鮮文学研究者の金思燁（キム・サヨプ）先生（京城帝国大学法文学部朝鮮語朝鮮文学専攻卒業）、朝鮮考古学研究者の永島暉臣慎先生らの講義も受けた。特に、江実先生と2人きりで話していたとき、私の話したことに対して、江実先生が「キミ！学問はすべて仮説なんだ！」と烈火の如く怒られことは忘れられない。モンゴル語の授業にも出たが、不甲斐無いことにすぐに

止めてしまった。

濱田敦先生(1913年～1996年)は考古学者濱田青陵(京都帝国大学総長)の御子息で、集中講義で出講されたときの会食の場で、「自分は過去のことを思うと、申し訳なくて朝鮮の土は踏めない」と語られ、韓国政府からの賞の授与も辞退されたようだった。『捷解新語』の講義は、最初の2、3行だけで90分ではとうてい時間が足りない、濃密な内容のものだった。御著書『国語史の諸問題』(和泉書院、1986年)の「はしがき」に記された以下のくだりには、胸が詰まる思いがする。

「三十年前、大阪市立大学を辞して母校にもどった時、四人のこどもをかかえて、唯さえ苦しい家計に大巾の減給、のどから手の出るほどほしかったはずの退隠料を、何の相談もせず、すっかり『捷解新語』の出版に使ってしまったような腕白亭主と、そ知らぬ顔で四十数年つきあって来てくれた、愛妻百合子に、この、ほんとに最後の、まずしい書を、感謝とともに捧げます。」

金東勲(キム・ドンフン)先生(龍谷大学名誉教授)は学生たちと良く付き合ってくださいました。鶴橋の飲み屋で、学生たちが歌を立て続けに歌っていた時、「朝鮮の歌を歌いなさい」ときつい語調で注意を促されたことがあった。歌には、歌い手の人生や思想が漂うものである。そのとき、学生たちは日本の歌ばかり歌っていたのだった。2次会にいく金がなかったときなど、夜遅く生駒にあった先生の御自宅まで押しかけて御馳走になったこともあった。授業で抵抗詩人金芝河の詩「黄土」を取り上げ、低くて太い声で朗読されたときは、教室は厳肅な雰囲気にも包まれ、感動的だった。

大阪外大に通っていたころ、私はちょうど1年間、いわゆる「生駒の朝鮮寺」で20畳のプレハブを借りて暮らしたことがある。そのいきさつは次の通りだ。ある事情から住居を引っ越そうと思い、近鉄奈良線石切駅近くの線路沿いにあるアパートに、ほとんどなにも荷物も持たずに入居したが、夜電車の音がうるさくて後悔した。翌朝、近くの生駒山の山道を散歩していたところ、四角の白い布が結び付けられた竹竿を立てた家が目に止まった。これはもしかして、と思って尋ねてみると、ムーダン(巫堂。朝鮮の女シャーマン)の家だった。他にもこの近辺にあるのかと聞くと、この道の上のほうにもあるという。急な山道を登りきったところ、一成寺という建物にたどり着いた。観音開きの門を入ったら、60歳ぐらいの在日朝鮮人のおばさんがいた。彼女(金載順氏)はポサルリム(菩薩さま)と呼ばれる慶尚道出身の在日朝鮮人のムーダンだった。日当たりの良い縁側に座り、線路ぎわのアパートを借りて後悔していることなどを話しているうちに、ここで住むのも悪くないなあと、ふと思った。在日朝鮮人のシャーマニズムに接することもでき、面白いだらうと思った。私が外大で朝鮮語の勉強をしていると話したとき、ポサルリムは「にいちゃん、ちょうせんごやってんのか」と嬉しそうな声を上げた。

ポサルリムは警戒感を和らげ好意的な態度に転じた。「あの 20 畳のプレハブで良かったら貸したるさかい住んでもええ」というので、好意に甘えることにした。私は深く考えもしないで、取り返しがつかない状況を招くことが少なくないが、これは失敗ではなかった。それから 1 年間、毎朝澄みきった生駒山の大气の中を、河内平野の街が一望できる辻子谷の 2 キロの坂道を軽快な足取りで下り、夜は満点の星のようにきらめく河内平野の街並を背に、プレハブまで息を切らしながら戻った。

一成寺には仏像を安置した本堂があり（これは火災で焼失したと聞いている）、ポサルリムは朝になるとソニーの小さなカセットプレーヤーに、朝鮮語で読経する声が吹き込まれたテープをセットし、自分はどうするのかといえば、住居に戻ってきて朝寝を決め込んでいる様子だった。高野山で修業をした証の免許状のようなものを部屋の壁に掲げてはいたが、「仏教僧」としてははてなマークの付くひとだった。

時々、在日朝鮮人が訪ねて来て ポサルリムと話し込んで帰っていった。そうした来訪者は、そのうちクツと呼ばれる祭儀をこの寺でやってもらっていた。ムードンの装束で身をくるんだポサルリムは、頭が割れるほど太鼓や鉦が打ち鳴らされる中、踊り狂ったり口寄せをやったりしていた。ある時、クツが終わったあと、クツの依頼主だったおばあさんが、「あんたはポサルリムの言ってたこと、ぜんぜんわからへんやろ」と朝鮮語が分からないパンチパーマのアンチャン風の孫を叱った。アンチャンはしょんぼりしていた。それまで私はクツを見たことがなかったので大変興味深かった。舞台上で演じられる朝鮮の歌や踊りとは違い、土俗的な自然さを感じさせた。今日まで伝承されている朝鮮の伝統音楽や伝統舞踊の 9 割以上の要素が、このシャーマニズムの文化に由来しているといわれる。あるとき、ポサルリムが包丁を両手に握って踊り狂うのを庭で眺めていたら、ポサルリムは「あかん、あっちけ！」と私を叱り飛ばした。後で聞くと、ちょうど悪霊が出ていくところだったそうだ。そういえば、部屋のまえに藁草履が外向きにおいてあったが、悪霊は草履をはいて逃げ出したのだろうか。あるときは、クツの最後に真っ白でとても幅の広い布を部屋の端から端まで水平にひっぱり、その真ん中をポサルリムが歩みながら胴体で真っ二つに引き裂いていった。呼び寄せた霊があの世界にまた戻って行った時だと、あとで説明を受けた。

一成寺には「みぶ（壬生？）さん」とよばれる下働きのおばさんがいた。みぶさんはむかし満洲にいたと聞いた。「ポサルリムには内緒だよ」と言いながら、密造マッコリの上澄みをコップに入れて飲ませてくれたこともあった。苦労を重ねてきたと思われる優しいおばさんだった。

何の時だったか、ポサルリムは山から竹を切ってくるようにと私に命じた。1 本切って帰ったところ、さきっぽが真っ直ぐでないから駄目だと言われた。その日の午後、ポサルリムは竹を捧げ持って庭のなかを踊るように跳ねたりしながら歩き回っていた。それが何を意味するものか聞きそびれて、今も知らない。

忙しい時には、韓国からお坊さんが助っ人でやって来た。ムゲン（早艸）という名のスニム

(お坊様)と知り合った。2度目に来たとき、私のために『日韓辞典』を買ってきてプレゼントしてくれた。この辞書はいまも大切にしている、たまに使っている。

クッはただ見せるためだけではなく、人生の苦悩、病苦などから脱却しようとする切なる思いが込められた人間の精神的営みだ。だから、舞台上で演じられる朝鮮民族芸能と異なり、作り物にはない土俗的な感動がある。韓国に滞在していた時も、ソウルや大邱などでクッを見せてもらった。いつだったか、人類学者の崔吉城(チェ・ギルソン)氏(広島大学名誉教授)や本田洋氏(東京大学教授)らと一緒に田舎をめぐり歩き、霊界結婚のクッも見た。未婚のまま死んだ娘の「処女鬼神」はとても恐れられている。これを慰めるため、新郎新婦の人形が作られ、床入りの儀礼まで行われていた。

1970年代末、私は友人と2人でしばらく東大阪市立長栄中学校夜間学級に行き、教室に座っていたことがある。在日朝鮮人一世が話す朝鮮語や日本語に関心があったからだ。当時、生徒のほぼ全員が在日朝鮮人一世の年配女性だった(最近も、在日朝鮮人生徒は皆無に近いという)。教育を受ける機会に恵まれず、日本語の読み書きができないために日々つらい思いを重ねてきた人々だった。夜間学級では日本語の読み書きが教育の主な目標となっていた。夜間学級を担当していた西尾先生や林先生とも親しくなった。ある時、「国語」の授業をちょっとやってみないかと言われた。「奚단叫」(帆掛け舟)という朝鮮語の詩を黒板に書いて日本語に訳す「授業」を始めると、女性たちは大きな声で声を合わせて朗読した。日本語の勉強では自信なげにもじもじしているのに、このときばかりは生き生きとした張りのある声だった。そうなんだ、この人たちの母語なんだ、私なんか足元にも及ばないと、目が覚めるような感動を覚えた。長栄中学校夜間学級の教師たちの研究会に呼ばれたことがある。テーマは在日朝鮮人一世が用いる朝鮮語から干渉を受けた日本語を修正すべきか、修正するならどこまでか、というものだった。私は、ひたすら「正しい日本語」に修正する必要はないと話した。「正しい日本語」の押し付けは在日朝鮮人一世が日本語の中に無意識のうちに投影した人生、民族性をリセットし消し去ることになるからである。例えば、在日朝鮮人一世の女性の間では、年上の女性を「ネエサン」と呼ぶが、これは朝鮮語「オンニ」(姉さん)ということばが持つ意味(血縁や姻戚関係にある人に限らず、広く年上の女性を呼ぶ意味)のまま、日本語「ネエサン」の衣を借りて語られているのである。日本語にも、異民族の文化がしみ込んだバラエティがあってもいいと思う。

旧猪飼野地区(生野区桃谷)にある聖和社会館(聖和教会)では、日本語識字学級(「生野オモニハッキョ」)が40年以上にもわたって運営されていて、かつて、私は何度か見学をさせていただいた。大阪外大朝鮮語学科卒業生の石塚直人氏(読売新聞記者)も、核心的なボランティアとして多忙な記者生活の合間を縫って何十年も教えておられた。その世俗的な対価を求めない生き方には頭が下がる思いだった。石塚氏の記者生活では、読売新聞の社是にそぐわない批判的精神を堅持されてきたように思う。梨花女子大学御出身の金静子(キム・ジョンジャ)氏とはこの識字学級で偶然知り合った。金静子氏はその後、大阪外大朝鮮語学科の「外国人教

師」(専任教員)として約10年間勤務され、退職後は関西大学にも非常勤講師として出講された。また、『재일 한국인 1 세의 한국어·일본어 혼용 실태에 대한 연구』(在日韓国人一世の韓国語・日本語混用実態についての研究)を2003年に韓国で出版された。

修士課程にいるとき、大学院をやめようかと迷ったことがある。日本社会党の機関紙「社会新報」で朝鮮関連の仕事でも出来ればと思い、アポなしで千代田区三宅坂にあった社会文化会館を訪ねた。「社会新報」社会部長が部下を引き連れて対応してくれた。「朝鮮語のことは朝鮮総連の協力を得ているから必要ない。高卒待遇で新聞配りから始めるのなら採用してもよい」ということだった。そこで、「社会新報」には朝鮮語ができる人間がいるのかと聞くと、「いない」と野党第1党の人間がすっぱり言ってのけた。そして、地元の社会党支部の推薦状が必要だといった。まず、社会党に入党しろというという意味だった。そこで、天王寺支部に行って事情を話した。支部の人は、「朝鮮って、焼肉とかキムチとか、あれですね」とかいい、話がかみ合わなかった。そうこうしているうちに嫌になって、この話はやめることにした。

故坂本孝夫氏は朝鮮労働党大会に招かれた時、社会党の一行には朝鮮語の分かる人間がおらず北朝鮮側が付けた通訳にへばりついてはいたが、我々共産党には通訳は必要なかったと私に話したことがある。坂本氏は朝鮮語学科1期生で「赤旗」ピョンヤン特派員の経歴を持ち、「萩原遼、井出愚樹、渋谷仙太郎」などのペンネームで、興味深い本をたくさん書き遺した。米国国立公文書館(National Archives)のメリーランド分館で10日間あまり北朝鮮資料を調査していた時、「あんた日本人か? サカモトという日本人知ってるか?」と、見知らぬ在米韓国人が声をかけてきた。「サカモトは立派だった。ただコピーするだけではなく、一日中ノートを取りながら資料を読んでいたよ」と話してくれた。坂本孝夫氏は日共から除名されたあと、黒人街のアパートに居を定めて2年半ほど国立公文書館に通い詰め、萩原遼の筆名で『朝鮮戦争』(文藝春秋社)を書き上げた。私が国立公文書館で文献調査をしたのは、朝鮮戦争中の1950年秋にピョンヤンに侵攻した米軍が略奪した大量の北朝鮮文書が公開されていることを、坂本氏から具体的に聞いたからだった。このための一か月間の研究調査旅費は新潟県から支給された。

IV. 一橋大学時代

修士課程を終えたあと、1981年4月から愛知大学と大阪市大に非常勤講師として出講することになっていた。

ところで当時、大阪外大には博士課程は設置されていなかった。このため、朝鮮語学科のほとんどの院生は他大学の博士課程に進学していた。当時、朝鮮語学専攻で大学教員のポストに収まるなどということは至難の業でなんの見通しもなかったが、とりあえず博士課程に進学していた。ある日、モンゴル語専攻の谷博之君と外大の図書館の近くで一升瓶を置いて、二人で酒を飲んでいたとき、彼はタナカカツヒコは面白いぞと口にした。私は『言語からみた民族と

国家』を興味深く読んだことを思い出し、一橋大学大学院に進みたいと思うようになった。

後日、塚本勲先生と北嶋静江先生に呼ばれ、修士課程修了後の進路を尋ねられた。私は「田中克彦先生の下で研究をしたい」と話したところ、「クマタニ君、一橋は帝大並みだよ」と、難しいぞと言わんばかりの反応だった。とはいえ、両先生はさまざまに心配してくださった。

入試は、語学試験30分、口頭試問1時間だった。試験会場となった教室には、田中克彦教授を真ん中にして、三谷孝助教授（現代中国史）と増谷外世嗣教授（英文学）が試験官として座っていた。まず、英書を2頁分コピーした紙が手渡され、日本語で口頭訳しなさいと指示された。それは言語学の本だった。1頁あまり訳し終えたあたりでストップがかかり、若干の質疑応答があり語学試験は終わった。引き続いて1時間の口頭試問が行われ、いろいろと質問されたが、知らないことがあまりに多くてまともに答えられた記憶がない。疲れを感じたころ、「時間です。もういいです」と田中教授が試験の終りを告げた。冷たく聞こえたその声の色から「ああ、落ちたな」と思いつつも、試験から解放された安堵感で体がすっと軽くなった。しかし、幸いにも一橋大学への入学が許された。

ゼミではフランス語、ドイツ語、ロシア語の文献講読が行われ、世界のさまざまな社会言語学的諸問題が議論されていた。まるで私は小さな川から海に流れ出た小魚のような思いだった。午後から始まるゼミは90分間ではなく、田中先生が今日はこれで止めようと言うときまで続いた。そのあと、よく国立の街に繰り出した。夜中12時を過ぎることも稀ではなかったが、そんな時でも田中先生は研究室のソファで仮眠をとったあと、早朝から研究されている様子だった。

私は院生寮に入居した。国立駅前から続く「大学通り」に面した東キャンパス構内にあった2階建ての古い木造建築で、御老人の卒業生が懐かしがって訪ねてくることもあった。大学側は建て替えを提起したが、寮委員会は建て替えれば、寮費の変更のみならず新しい「寮規則」が適用されて、寮生による自主的管理運営が制限されるため反対していた。学長は寮委員会との交渉のため時々院生寮に向いてきた。この寮には年老いた猫がいた。よく玄関口のところに座っていて、玄関の引き戸を開けると、この猫はすぐさま私が入居していた4号室の前まで先に行って、私がかぎを開けるのを待つ猫だった。部屋にいる時はときどき、爪先で引き戸をあけて入って来た。ところで、院生寮の中庭に野良猫が住み着いていた。餌をやる心優しい院生もいたからである。「うるさい、汚い」ということで、月1回の寮生会議にこの野良猫の処分が議案として取り上げられた。法学研究科の院生は、「国有財産の敷地内で、許可なく勝手に生物を飼うことはできない」などと屁理屈をこねた。人をも殺すのが法律で、こんなやつが裁判官になるのかと恐ろしくなった。延々と議論が続いたあと採決がとられ、私を含む野良猫擁護派は惨敗した。さらに、その後が問題だった。誰が保健所に連絡するのかを決める段になると、みんな沈黙したのだった。去年の秋、田中克彦先生の講演を聞きに愛知大学に行ったとき、野良猫擁護派だった葛谷登氏（愛知大学教授、中国宗教思想史）と35年ぶりに再会した。彼は昔

から敬虔なクリスチャンで、野良猫騒動の時も、その宗教的信念を貫いたのだろうと改めて思った。

地元の国立公民館でしばらく朝鮮語学習会をやり、「メダカの会」と仮に名乗っていたわずか4、5人の小グループで教科書問題を議論したこともあった。「メダカの会」のメンバーだった池上善彦氏（当時、一橋大学社会学部学生）は、とにかくよく本を読む人で、あちこちの公共図書館に購入希望を出し、借り出しては読破していた。その幅の広さと強靱な読書力は驚くべきものだった。のちに、池上氏は雑誌『現代思想』の編集長を20年間務めた。社会人類学専攻の鈴木仁志氏（麻布高校教諭）もメンバーの一人で、生駒の朝鮮寺の話をする、間もなく鈴木氏は自分で探し出した朝鮮寺で庭掃除などをしながら事例研究をして、修士論文を書き上げた。私が朝鮮寺で暮らした何年か後、京都大学を中心とする学術調査団が生駒に入り、フィールド調査に基づく『生駒の神々—現代都市の民俗宗教』を刊行した。

1982年には韓国との間で歴史教科書問題が持ち上がった。「メダカの会」で学習会をするため、私は韓国の高校歴史教科書の近代史の部分を日本語に訳して提供した。これを読んだメンバーたちは、およそまっとうな歴史記述がなされたとは言えない感情論的な教科書に、誰もが唾然とした。しかし、それはそれとして日本の歴史教科書の問題点を批判するデモに出かけた。

韓国に留学する少し前、ドーデの「最後の授業」についての考察に注目した光村図書が、神戸での大講演会に田中先生を講師として呼んだ。一緒に行こうと田中先生に誘われた。田中先生は「両親に会わせろ」というので、父母と大阪で昼食を共にした。その時、田中先生は父に向かって「息子さんは戦争に行くのではない。生きて帰ってくるから心配なくてよい」という時代があった言い方をした。戦争を体験した老年の父には分かりやすい言い方だったかもしれない。神戸での講演会が終わったあと、「一緒に僕の親の家に行こう」と誘ってくださり、但馬地方にあるご実家に伺った。

ところで、私の父は3度徴兵され、朝鮮半島を経由して衛生兵として中国戦線に連れていかれたりし、最後は米軍上陸に備えて宮崎にいたという。父は、米軍が上陸して来たらどうして逃げようかと、いつも考えていたという。私の臆病さ、危険な修羅場は極力避ける習性は、親譲りのものかも知れない。

田中先生はあるとき、「いつも僕は、この本を書き終えたら死んでもいいと思いつつ書いてるんだ」と話されたことがある。従来の思考の枠組みに疑問を呈する斬新な著作を次々と世に問うことの苦悩を語られたのだと思う。ちらっと、「僕は貧しい人の学問は嫌いだ」と話されたことがあった。他者から自分がどう見られるのが怖くて、自由な思考を巡らせない学問を批判したのだと理解している。田中先生は、歴史の荒波に抗した言語学者たちが、それ故に国家権力によって殺害されてきた多くの事実を具体的に明らかにしつつ、「たたかう言語学」のありようを著作の中に描いてきた。こじんまりしたメシのための言語学ではなく、歴史的使命を担った言語学が見失われていることを、訴え続けてこられたのだと思う。

多くの中国書を翻訳出版されている納村公子さんと田中先生と3人で箱根温泉に1泊旅行をしたことがあった。田中先生は道端の猫の肩をもみながら、「肩がこってるんだね」と声を掛けた。猫も肩がこるのか？手が届かないからかゆいのではないかと考えたが、猫にきいてみるわけにもいかない。どうでもいい、つまらないことだが、なぜか書いておきたくなった。

田中克彦先生から受けた影響は、「恐れることなく、もっと自由に思考しろ」の一言で要約できるように思う。

東京にいた間、私は朴慶植（パク・キョンシク）先生が主宰する在日朝鮮人運動史研究会に通った。毎月1回例会が開かれ、出席者は10数人ほどだった。故梶村秀樹氏（朝鮮近現代史研究者、当時神奈川大学教授）、樋口雄一氏（戦時下総動員体制の研究者、公務員）、山田昭次氏（日本近代史研究者、立教大学名誉教授）は主だった常連メンバーだった。

梶村秀樹氏は時代がかった丸縁メガネを鼻からずらしたまま、いつも根元まで燃え尽きるまで煙草を指から放すことなく、しばしば「よくわからない」と繰り返し口にした。

朴慶植先生は、柴崎にある公団住宅を書斎として使っておられた。私は慶應義塾大学に通う友人と一緒に、毎週日曜日になると朴先生の書斎を訪れ、お仕事を手伝っていた。敗戦直後の戦後期、非合法化された朝鮮人聯盟などさまざまな団体のビラ、パンフレットなどを収集して床下に隠し持っていたものを、資料集として編集して続々と刊行されていた。

テーブルに座り、古いビラにこびりついたシミや汚れをホワイトでていねいに塗りつぶしていくだけの、実に単調な作業だった。まともに座れるスペースと言えばその大きめのキッチンテーブルしかなかった。浴室まで本置き場にされていたし、部屋の前の廊下には段ボール箱が積み上げられていた。

朴慶植先生も虫眼鏡を覗き込みながら同じ作業をなさっていた。朴先生の在日朝鮮人運動研究にかけてきた執念に心打たれ、そんな単純作業をいとわしいと思ったことは一度もなかった。日が沈むころになると、甲州街道のそばにある、先生お馴染みの飲み屋さんでカウンターに腰かけてビールを飲むのが常だった。そのうち、朴先生は決まったかのように座ったままウトウトと舟をこぎ始めるのだった。

朴慶植先生は北朝鮮の政策に同調しきれず朝鮮大学校地理歴史学科の教授職から追放されたあと、お金に困って古本屋を開いたことがあると言って、かつて古本屋を開いていたという古ぼけた建物に案内して下さったことがある。店に並べた本は朴先生が所蔵していたもので、本が売れるたびに胸が痛んだという。朴先生の蔵書は、今は滋賀県立大学に「朴慶植文庫」として大切に所蔵されている。私はどこを探しても入手できない文献資料を何度かこの文庫から見出し、コピーをさせていただいた。そのたびに、朴先生の歴史資料に対する慧眼を痛感した。東京で古本市が開かれると、朴先生が見て回った後では、近現代朝鮮史関係のめぼしいものはすっかり無くなっていったというのが、もっばらの噂だった。たとえ食を抜いてでも文献資料の収集に傾倒する朴先生ならではのことだった。

県立新潟女子短大に勤務していた1998年2月、甲州街道で朴慶植先生が交通事故に遭ったという訃報に接した。柴崎の書齋で仕事を終えた後、いつものように調布の御自宅まで自転車で帰られる途中でのことだった。20代前半の会社員の男が運転する車に轢かれたという。何ということをしてくれたんだと恨んだ。

1982年のことだったが、朴慶植先生の周辺の研究者たちが間もなく還暦を迎える先生のために祝いの宴を開こうと考えた。朴先生は幾度も固辞され、ついには大声を張り上げて怒られた。後でわかったことだが、朴先生は父親の死に目にも駆けつけられなかった親不孝者の自分が、なんで還暦祝いなんかしてもらえるのか、ということだった。韓国政府は反政府系の人々の入国を厳しく制限していたためだった。6歳のとき（1929年）、両親と共に渡日し、戦後、朴先生は帰国する家族と別れて日本に残留されていた。

一橋大学に通っていたある日、キャンパスの掲示板に張り出された文部省海外派遣国費留学生募集の小さな公示を目にし、ふと留学してみようかと思った。書類審査と面接の学内選考だけで、4人の応募者のうち3人が留学を許可された。

留学に先立ち、早川嘉春氏（フェリス女学院大学名誉教授）に会っていただき、韓国事情や日本語教育事情などを伺った。また、韓国入国直後、どなたの紹介だったか失念したが、ソウルの日本大使館専門調査員だった秋月望氏（明治学院大学教授）にロッテホテルで会っていただき、いろいろな韓国事情を伺った。その後6か月間は、日本人、在日韓国人とは一切会わない方針を貫いた。

東京を発つ日、あとで開けなさいと言いながら田中先生は封筒をひとつ私に手渡した。飛行機の座席に座ってから開いてみると、必要なときに使いなさいという手紙を添えて数枚のきれいなお札が入っていた。その数日前のことだったか、父も「持って行け」と分厚い裸の札束を握らせてくれた。留学に旅立つにあたり、さまざまな思いがこみ上げ、機中ずっと涙ぐんでいた。そんな私が気になったのか、スチュワーデスがしばらくそばに寄り添い、優しく声をかけてくれた。

V. 韓国滞在期

私は高麗大学大学院の金敏洙（キム・ミンス。1926年～2018年2月15日）先生のもとに留学した。金先生は指折りの著名な朝鮮語研究者で、当時、北朝鮮の言語政策研究では第一人者だった。

1947年、金先生はソウル大学（前身は京城帝国大学、京城大学）に1期生として入学され、学部3年生の時には公州師範大学に出講されている。金先生の優秀さを思わせるとともに、当時、学部生が大学講師として出講するほど高等教育における人材が不足していた。朝鮮戦争が勃発するとソウル大学は釜山に避難したが、金先生が中心となって釜山で国語国文学会が立ち

上げられた。

留学して1か月後(1983年10月9日)、全斗煥(チョン・ドゥファン)大統領を狙ったアウンサン爆弾テロ事件が発生した。北朝鮮によるこのテロで韓国政府閣僚4名を含む21名が爆死した。図書館にいた学生が下宿に戻ってきて言うには、「不条理だ。なんで全斗煥が死なないで李範錫(イ・ボムソク)外務部長官が亡くなったんだ」と図書館にいる学生たちが嘆いていたということだった。李範錫氏は植民地時代に法政大学予科を卒業し、解放後は高麗大学英文科、メリーランド大学、ジョージワシントン大学大学院などで学んだ人で、高麗大学学生たちの間で人望が厚かった。

留学先として高麗大学の博士課程を選んだのは金先生の指導を受けたかったからだが、さらに高麗大学は4.19革命(1960年)の突破口を切り開くなど、学生運動でも名を馳せていたからでもあった。

1983年8月末、金敏洙先生と研究室で初めてお会いしたとき、留学を始めるにあたっての注意事項を話すと前置きしたうえで、「日本の感覚での言動は差し控えなさい。ほんの2、3年前、あの正門前に軍の戦車が止まっていた」とため息交じりに、よどんだ声で話された。そのあと、研究のこと、古本屋での文献資料入手のコツ、日常私生活での注意点など、公私にわたる助言を懇切丁寧に話された。旧正月にお宅に招待してくださった時は、これが私の故郷(江原道)のお雑煮だよといってトッククを御馳走して下さったり、韓国伝統のお菓子を目の前で作って下さったりした。私と二人きりのときには、先生は日本語で会話することを好まれた。権威ぶることのない誠実な方だった。

当時、韓国における北朝鮮研究は、反共主義の立場を明確にして北朝鮮を批判するものでなければ、お上から危険な思想を持った人間として睨まれかねない状況だった。だから、1987年に全斗煥軍事独裁政権が打倒され民主化が進むころまで、ほとんどの研究者は、我が身に累が及ぶことを恐れて北朝鮮研究に手を付けなかった。それでも、民主化闘争の推移をいち早く見通した高麗大学国文科の院生たちは、北朝鮮で刊行された数十冊の朝鮮語学関連のコピー一本を作り、仲間うちで分かち合っていた。私にも声がかかったので譲ってもらった。原本も持っているが、それらのコピー一本は今も捨てないでいる。

韓国入国後の1983年9月上旬、在留申告のためソウルの出入国管理事務所に行った。指紋をとるといので、「どうしても押さなければならないのか」と非協力的な態度を示したところ、窓口の職員は奥の方にいる職員としばらく何か話したあと戻ってきて「いいです」と言った。当時、日韓間で在日朝鮮人の指紋押捺問題が外交問題として浮上していた。私が指紋を押さないためにこねた理屈は、1年以上(あるいは6か月以上だったか?)継続して韓国に居住する外国人は指紋を押さなければならない規則があったが、「今の時点で、私がいつまで韓国で暮らすことになるか分からないではないか」というものだった。

1986年9月、ソウル・アジア競技大会開催予定の1週間前に金浦空港で爆弾テロ事件が起こ



金敏洙先生（高麗大学名誉教授、写真左側）とともに
2011年11月25日撮影

った。これに伴い、在韓外国人の一斉チェックが行われたためか、ソウル入管から出頭を促すはがきが家に届いた。指紋押捺をしないまま丸3年が経っていたときである。出頭すると案の定、指紋を押せという。NHKや朝日の特派員を引き連れて出頭し、「拒否します」などと言って闘う覚悟も勇気もない私は、入管の求めに従った。10本の指をローリングさせながら押されているとき、横に立っていた男の職員が「あんた、毎日男の手が握れていいなあ」と、女性職員に向かって「冗談」をいった。これが、在日朝鮮人の指紋押捺を非難する韓国社会の人間の感覚なのかと思ひ、むかついた。

市内の宝飾品店に行ったとき、店の主人が「あんた日本人だろう？我が在日同胞の指紋押捺をどう思う？」と議論を吹っかけて来た。「僕も、ここで指紋をとられたんだ」と答えると、その店主は、「韓国人はみんなが押しているから、あんたが押すことに何ら問題はない」と反論してきた。韓国では、官民挙げて指紋押捺を普遍的な人権侵害としては捉えられず、民族差別の側面に限定して政治問題化しているに過ぎなかった。

そのしばらく後に一時帰国した。研究のため一橋大学に来ていた言語学者ハールマン（Harald Haarmann）氏と環状線鶴橋駅を通りがかったとき、在日朝鮮人の指紋押捺反対の署名運動に出くわした。ハールマン氏は署名運動の目的を理解すると、さっと歩み寄って署名をし、「ドイツでは、犯罪容疑者の有罪が確定したあとでないかぎり、指紋は押さない」と言った。

朴慶植先生が韓国に来られたことがある。事前に私に連絡があり、「ソウルの出版社に、訪問すると伝えてくれ」とのことだった。その出版社は朴先生が心血を注いで出版した資料集を不法にコピー製本して販売していた。道案内かたがた、私は朴先生に同行した。朴先生は出版社の不法行為を非難して社長に激しく詰め寄った。あんなに激昂した先生に接するのは初めてだ

った。そのあと、ソウル市立大学近くの御兄弟のお宅に向かった。朴先生と再会した御兄弟は、積年の恨みを吐き出すように朴先生をなじった。かつて、御兄弟が空港職員として就職が決まりかけたとき、朴先生のことが問題になって就職話は御破算となって苦労を重ねたことなど、恨みをぶつけられたのだった。朴先生はしょんぼりされていた。韓国では、「パルゲンイ」(アカ)が家族親族の中に一人でもいると、周辺の人には連座制が適用され、さまざまな形で社会的制裁を受けていた。おもえば、私は高校生のとき『在日朝鮮人強制連行の記録』(未来社、1965年)を興味深く読んだが、これが朴慶植先生との最初の出会いだった。

韓国の祝日「ハングルの日」(1986年10月9日)のことで、毎年この日には朝鮮語や朝鮮文字(ハングル)に関連する特集番組が組まれていた。テレビを見ていたら、ドイツ留学から帰国直後の金河秀(キム・ハス)氏(当時、延世大学教授)が特集番組で「南と北のことばは、言語学的には全く同じ言語です。したがって、「南北異質化」を強調しない方が良い」と話すのを見て、私はびっくり仰天した。当時、南北間の言語「異質化」の責任は全的に北朝鮮にあるという論調しか許されなかったからである。その後間もなく、ある学会で金河秀氏とお会いした時このことを話したところ、「今なら、あの程度は大丈夫だと判断した」と話された。微妙な政治的变化を読みとってのことで、韓国の学者は時代の流れに敏感であることを考えさせられた。

韓国に留学する少し前、朝鮮総連中央本部に勤めていたある女性に『朝鮮労働党政党史(言語部門)』を入手したいと頼んだことがあった。彼女はへと7、8冊ほど持ってきて、ただで私にくれた。そして、「南朝鮮のトンム(友だち)たちにも渡してほしい」と言った。それがどれだけ危険なことか、彼女にはわからなかったのだろうか。その後しばらくして、彼女に連絡を取ろうと朝鮮総連に電話をしたところ、電話を受けた人は「その人は今はいない」、「どこに行ったか知らない」と答えるだけだった。彼女は一体どこに消えたのだろうか。

1980年代末ごろ、朴慶植先生から光復会会長の李康勲(イ・ガンフン)氏に著書を届けてほしいとの依頼を受けた。李康勲氏は1933年、上海で日本の駐中公使にテロを加えようとして検挙され日本に移送された人だ。1945年10月10日まで府中刑務所で拘禁され、その後民団の副団長(団長は朴烈)をつとめた経歴の持ち主である。国会議事堂のそばにある光復会館で李康勲氏にお会いしたところ、日本料理屋に連れて行ってくれた。料理が運ばれてきたとき、随行していた部下に向かって、「きみ、日本の醤油はうまいんだよ」と小皿に注ぎながら言った。一命を賭して日本と闘った人やその遺族を構成員とする光復会の会長のことばだった。

醤油といえば思い出すことがある。外貨不足の1980年代、韓国ではコーヒーではなく「国産茶」を愛用しろ、外国タバコは吸うな、などと外国製品不買キャンペーンが展開されていた。そんなとき、朝のテレビ番組に日本大使館職員の奥さんが出ていた。4つの白い小皿に注がれた醤油を順々にスプーンですくって味見をし、どれが日本製の「ウェカンジャン(倭醤油)」であるかを言い当てさせる企画だった。この奥さんは味見をしたあと、「分からない」と答えた。司会者は我が意を得たとばかり、「そうですね。このような日本の高貴な方でもわからないの

です」と締めくくった。後日、夫の大使館員に会ったとき「テレビ見ましたよ」と話したところ、彼は「実はね、あれには裏話があるんだ。妻は1回目で言い当てたが、そのあと何回も撮り直しをされた。そのうち妻は何が求められているかを察し、「分からない」と答えた部分が放送されたんだ」ということだった。

1990年頃、私は1960年代後半期から1970年代前半期にかけて北朝鮮で展開された「教育の党政策化」政策に関心を持ち、資料集めをしていた。これは金日成の思想のみを公認イデオロギーとする「党の唯一思想体系」を、教育を通じて徹底させようとする政策だった。『人民教育』など北朝鮮の資料はある程度確保したが、この教育政策が在日朝鮮人教育にどのような変化をもたらしたのかを知りたく思っていた。朝教同（在日朝鮮人教職員同盟）は朝鮮語版と日本語版の内容が異なる2種類の機関紙を発行していたが、朝鮮語版は部外秘とされていた。この朝鮮語版のバックナンバーをコピーしたくて、朝教同本部が入っている朝鮮出版会館（東京都文京区白山）に行った。1階ロビーに降りてきた関係者にお願いしたが断られた。何日かのち、しつこく訪ねて行ったところ「朝鮮冷麺を食べよう」といって、会館のそばにある朝鮮料理屋に連れて行ってくれた。その時、彼は「私の親族の連絡先だ。ソウルに戻ったら連絡を取ってほしい」と言いながら、ソウル在住の何人かの人の名前と住所と電話番号が書かれたメモを差し出した。自分で連絡すればいいじゃないかと思われるが、当時、国際郵便物や国際電話は密かに情報部のチェックを受けていた。これが交換条件だったようで、朝鮮語版のコピーを少しとることが出来た。韓国に持っていくのは怖いので、次に一時帰国する時に書こうと思って茶封筒に入れて実家に置いておいたところ、親はごみと勘違いして捨ててしまったようだった。「教育の党政策化」と北朝鮮の国語教育」（『韓国外語大学校論文集』第25輯、1992年）を書いたとき、「朝総聯系民族教育と「教育の党政策化」に関する問題については、いつか適当な機会に稿を改めて整理したいと考えている」と書くしかなかった。ところで、ソウルで連絡をとるように依頼された件については、厄介なことになって困るので、かつて情報部に務めた経歴を持つ韓国外語大学の教授に相談をした。予想した通り「やらない方がいい」というので何もしなかった。

今はどうか知らないが、当時の情報監視は厳しかった。情報部に就職した卒業生が訪ねてきて、「毎晩、日本からかかる国際電話を聴いているが、オトコとオンナの話ばかりで嫌になった」とこぼしたことがあった。また、ある卒業生は国際郵便物が担当で、不審な郵便物は後でチェックするために、そばに置いた籠に選り分ける作業をしていると話した。私も、日本から届いた封書の上部を開いても中の便箋が取り出せず、よく見ると便箋が封筒下部に張り付いていたことがあった。便箋の下部から開いたあと、のり付けをした時にはみ出したのりが便箋にくっついていたのであった。またある時、同じ外国人教授アパートに暮らすドイツ人教授が血相を変えてやってきて、「これみてくれ、開けられている」と私の鼻先に封筒を突きつけた。

当時、外国人教授アパートの部屋の電話では、念のためヤバイ話はしないというのが居住者

の暗黙の了解事項だった。電話回線は全て管理棟を経て外部につながっているからだった。ある日本の新聞社のソウル特派員が、マスコミ担当の情報部に「私のマンションも盗聴しているのか」と単刀直入に聞いたところ、真偽のところは不明だが「そこまでは余裕がない。だいたい200～300か所ぐらいだ」と言ったという。軍事独裁政権の時代は、ソウル支局のドアの横で情報部員が待機していて、支局員が出勤すると「おはようございます」と声をかけて来たという。また、電話で東京に送稿しているとき、韓国政府に都合の悪い内容になるといきなり電話が切れたという。ソウルの日本国大使館では、不測の事態に備えて盗聴できない電話回線(海底ケーブル)を24時間常時つないでであると、高位の大使館員から聞いた。

韓国に留学した当初は、高麗大学近くの前付きの下宿屋に入った。下宿屋の主人は3歳ぐらいの娘を持つ未亡人だった。秋夕(旧暦の8月15日)には下宿生は一斉に帰郷して、私だけになった。その日、この女主人は秋夕に食べるソンピョン(松餅)を居間で一緒に作りながら、韓国の風習を教えてくれた。この下宿にいた高麗大学国文学科の女子学生は、こんな本を持っているのよと、レーニンの本をそっと私に見せた。私は日本から持ってきていた樺美智子の遺稿集『人しれず微笑まん』を彼女にあげた。

そのあと引っ越した下宿は、高麗大学国文学科に通う女子学生の親がやっている下宿屋だった。主人がひどい夫婦喧嘩をやったとき、この女子学生が2階にいた私に「助けて!」と叫ぶので、夫婦の部屋に下りて行って仲裁を試みたことがある。興奮した男主人は握っていた裁ちばさみを私に向けたので、退散した。だから、下宿の男主人は私に恨みを抱いたのかも知れない。ほかの下宿に移ったあと、私の外出中に刑事がやって来たと聞いた。この男主人が情報部に「怪しい日本人がいる」と通報したのだった。スパイが摘発されると、通報者には報奨金が支払われる。私が怪しまれたのは、電話代請求書を主人が盗み見て、それが普通の庶民感覚からすると異常に高額だったからだ。

また、地方都市の大学で勤務していた私の友人は、彼が打つタイプライターの音をきいた近隣の住民に通報された。モールス信号を送っているのではないかと疑われたためだった。このように当時の韓国社会は、ともすればスパイ扱いされない不気味な緊張感が漂っていた。ある時、日本人からやって来た知人と地方都市の料亭で酔いに任せて北朝鮮の歌をうたい、店を出たところで警察官に誰何された。店の従業員から通報があったとのことだった。大学教授であることを話し、身分証明書を提示したところ事なきを得た。これは、ひとえに私の軽率な振る舞いの結果でしかなかった。

1980年代中盤、日本の経済誌の記者に通訳として随行し、ソウル郊外にある現代財閥系のIT関連企業を直撃取材したことがある。会社の正門受付で取材のため入構したいと頼んでも、「だめだ」の一点張りだった。がちが明かず、ふと私は韓国外大の教授だと話したところ、一変して入構が許可された。受付の男性は私を韓国人と思ったのかも知れない。2階にある事務室のドアを開けた瞬間、振り向いた職員たちがバタバタと書類を裏返し、数十人いた広い事務室

に緊張が走った。奥の方にいた人が「何をしに来た、帰れ！」と私たちを一喝し、取材どころではなかった。それにしても、韓国では大学教授の社会的権威は高かった。

当時、韓国にはマルクス主義文献を渴望する学生が少なからずいた。高麗大学図書館の奥まったところに置かれたコピー機では、学生たちが日共系の出版物をコピーしている姿がみられた。「運動圏の学生」(活動家)たちは、日本語の文献を読むために日本語を速修していた。そのための薄っぺらい日本語学習書も作られていた。日本語は朝鮮語と構文が酷似しており、漢字仮名交じり文である上に、朝鮮語の近代語彙のほとんどが近代日本語から受容されたものである。このため、発音は違っても漢字表記されたこれらの近代語彙は韓国人には容易に理解でき、特に社会科学文献では「てにをは」など助詞や助動詞の文法形態を理解すれば、比較的容易に大意が把握できるようになるからである。韓国外大では日本語学科以外の授業も担当した。5年間在学すれば2つの学科の学位がもらえる「副専攻」制度があった。そこにはロシア語学科の学生たちもいた。なぜ日本語を学ぶのかと聞いたところ、『岩波ロシア語辞典』を使うためだといった。英語訳より日本語訳の方が理解しやすいので、「露英辞典」などより使い勝手が良いというのだった。当時、韓国にはまともな「露韓辞典」はなかった。ドイツ語学科の学生たちも受講していた。なぜかと聞くと、「せんせい、ドイツ語を一生懸命勉強して就職ができますか？」というのだった。

当時、北朝鮮の文献を見るためには、情報部の審査を受けて発給される「不穩文書閲覽許可証」を所持していなければならなかった。また、複数人が一緒に北朝鮮文献や共産主義文献を読むだけでも法に触れ、身の安全は保障されなかった。

しかし、金敏洙先生は政治的にニュートラルな立場を堅持する学者だった。テレビ取材は受けたくないとおっしゃったことがある。撮影したテープから一部分を切り取り、自分が話したことは逆の内容で放送されてしまうからだということだった。

金敏洙ゼミの院生だった李商赫氏(イ・サンヒョク、漢城大学教授)から最近聞いた話だが、金敏洙先生の晩年、ずっと病床に付き添っていた彼は、先生に「最も尊敬する朝鮮語研究者はどなたでしたか」と尋ねたところ、金壽卿(キム・スギョン)と李克魯(リ・グンノ)と柳應浩(リュ・ウンホ)だとおっしゃったという。

金壽卿は京城帝国大学法文学部と東京帝国大学文学部で学び、1946年に「越北」したあと金日成総合大学朝鮮語講座長となった。李克魯は1948年に「越北」した朝鮮語研究者で、1919年の3.1独立運動のとき中国に亡命し、その後、ヨーロッパでパンフレットを配布して日本帝国主義の朝鮮植民地支配の不当性を訴えたりした。ベルリン大学で博士学位を取得し、朝鮮への帰途イギリスでダニエル・ジョーンズとも会っている。これが契機となり、李克魯は国際音声記号にもとづく朝鮮語の音声体系を国際音声学会に最初に登録する仕事に携わった。北朝鮮に渡ったあと、最高人民会議常任委員長などの要職に就き、1960年代の「文化語運動」(北朝鮮における標準語の整理確立運動)を主導した。柳應浩(リュ・ウンホ)は東京帝国大学言語

学科で学び、1950年に朝鮮戦争の最中に北朝鮮に渡って金日成総合大学語文学部の教授として音韻論研究に携わった。いずれも北朝鮮における朝鮮語研究の礎を打ち固めた人々たちである。金敏洙先生は「学問的实力を備えた純粋な人々が北に渡って行った」と、これらの「越北」研究者を高く評価されていた。金敏洙先生は解放直後に聞いた李克魯の特別講義に感銘を覚え、朝鮮語学研究への志を固められたとのことである。1980年代までの韓国は、「越北」した学者の名前は「李〇魯」のように伏せ字で印刷されるなど、半ばタブー視される時代だった。そんな時代にはおくびにも出せないまま、金先生はじっと真実を胸に秘めてこられたように思われる。

李克魯はベルリンから朝鮮に戻ったあと、朝鮮語学会の核心メンバーとして朝鮮語語文運動の先頭に立った。1942年10月に民族独立運動を謀っていると見なされた朝鮮語学会会員たちは次々と検挙され、治安維持法第1条違反のかどで起訴された。この朝鮮語学会事件は2人の獄死者まで出した、朝鮮語研究に対してでっち上げられた弾圧事件だった。李克魯は首謀者として実刑判決を受け、1945年8月17日まで4人の学会メンバーが獄中に囚われていた。

金寿卿は京城帝国大学法文学部と東京帝国大学で学んだ言語学者である。小林英夫がソシユールの『改譯新版 言語学原論』(のち『一般言語学講義』と改題)を出すとき、金寿卿はこの翻訳改訂作業に協力したとも聞いている。李克魯も金寿卿も、北朝鮮での言語政策遂行において、中心的役割を果たした人々たちだった。

私は留学後、経済的に余裕がなくなったこともあり、ソウルの日本大使館で専門調査員として勤務していた成澤勝氏(元東北大学教授)を訪ねた。ちょうど大田実業専門大学(又松情報大学の前身)で日本人教員を探しているということだった。渡りに舟とはこのことで、すぐ紹介してもらって就職することにした。履歴書を持参して面接を受けに行ったところ、学長、副学長、事務局長がそろって鄭重に対応してくださり、即決採用となった。学長は韓国でも著名な企業の実業家でもあり、奥さんは日本人だった。副学長はその御曹司だった。日本の敗戦後、朝鮮に残った多くの日本人妻は冷酷にも夫からごみのように捨てられ、塗炭の苦しみを味わっていた。しかし、この学長は大切に奥さんを守った、人望が厚い方だった。私は大学院に通っているもので、ソウルと大田に二重に住居を構えなければならないと話したところ、経済的にも特別に手厚い配慮をしてくださった。新設された「観光日本語科」のただ一人の専任教員として勤務を始めた。入学してきた30数名の新入生たちは、とても情に溢れた愛すべき学生たちだった。しかし数か月後、韓国外国語大学から専任教員にならないかとの誘いを受けた。大田の大学にも学生たちにも大変失礼なことになるが、この絶好の機会を逃したくなく、韓国外大日本語学科に移ることにした。大田の大学では、仕方ないから誰か後任者を探すよう求められた。すぐ東京に戻って、一橋大学の院生研究室棟のエレベーターに手書きの募集案内を張り出したところ、同期入学の二木博史氏(東京外大名誉教授、モンゴル学)が後任を勤めてくれることになり、大変ありがたかった。

少なくとも私が韓国にいた1990年代のはじめ頃までは、韓国の大学では日本語教育専門家が専任教員として採用されることは少なく、韓国で朝鮮語学、朝鮮史、朝鮮文学などの研究をしていた人々が採用されていた。そこには、朝鮮研究者を助けてあげようという韓国人研究者たちの温かい思いやりがこもっていたように思う。待遇も韓国人教員と同じか、あるいはさほど違いがなかったし、私の場合は韓国外大所有の2DKの外国人教授アパートに無料で入居できた。多くの日本人研究者たちは、こうした韓国人の好意にどれだけ助けられたことか。

アパートでは時々、それぞれが料理を持ち寄ってパーティーが開かれたが、真夜中まで帰らないで騒いでいるのは、きまってラテン系の先生方だった。私の部屋の隣に、外国人アパートとしては例外的に韓国人の崔先生が住んでいた。崔先生は東京帝国大学を卒業し、解放後韓国の第1回外交官試験で主席合格して外交官生活をされた後、韓国外大で教えられていた。崔先生の部屋の前を通りかかったとき、時々日本の軍歌が漏れ聞こえた。私の部屋に遊びに来られた時お尋ねしたら、「日本の軍歌が好きだ、何だったらテープ貸してあげようか」とおっしゃった。聞きそびれたが、かつて日本軍におられたのかも知れない。金大中氏が率いる平和民主党から国会議員選挙に出られたが、落選した。

私が韓国での留学生生活を始めた1983年秋は、光州事件以後抑圧されていた学生運動や労働運動が再び活性化し始める時期にあっていた。学生運動では官制の「学徒護国団」から在野の「総学生会」へと転換をはじめており、労働界では御用組合色の強い韓国労総の統制を是としない民主的労働運動が勃興しつつあった。数多くの大卒者や、現役の学生たちが続々と姿を消し、「マチコーバ」（彼らは「町工場」の意味でこう言った）で溶接などの技術を身につけたあと、中卒などと学歴を詐称して大企業の生産現場に潜り込み（「偽装就業」と呼ばれた）、現場労働者をオルグしながら闘う労働運動を組織していった。

私がソウルで親しくしていた李君が、ある日学友7、8人を連れて私の下宿に遊びに来た。しばらくして、学友の一人が突然李君に向かって「おまえは親日派だ。なぜなら、日本人と親しく付き合っているからだ」と非難したところ、李君は「外に出ろ！」と言い返して、ちょっとした喧嘩になったことがある。この李君は卒業式の日（1985年2月）、高麗大学のグラウンドで「恥ずかしい」とつぶやいた。同じ学科の学友たちが、反独裁闘争の熾烈な闘いで逮捕され、次々と大学から追放されていたからである。李君の二人の兄弟も学生運動の指導者として反政府運動を主導したかどで大学を除籍され、新たな活路を求めて日本に留学していた。だからなのか、李君は大学総長の職にあった父から「お前だけは……」と諭され、真っ昼間から焼酎をあおり学友に申し訳ないと泣いていた。その後、彼も日本に留学した。

この年の高麗大学の卒業式は感動的なものだった。校庭に設けられた壇上に金俊燁（キム・ジュニョプ）総長が挨拶に立った。学生たちは誰もが、溢れんばかりの尊敬の念がこもった熱い視線を総長に注いでいた。独裁政権は、反政府運動に加わる学生たちを処分するよう各大学に強要していたが、金俊燁総長はこれになかなか応じず、この卒業式後に解任されることにな

っていた。私は演壇のすぐわきで見ていたのだが、金俊燁総長のこわばった顔には悲壮な影がちらついていた。この年、ソウル大学の卒業式では総長が演壇に立つや否や、数千人の学生たちは一斉に総長に背を向けた。独裁政権に抗うことが出来ない総長への無言の抗議だった。高麗大学の金俊燁総長は慶応大学在学中の1944年、学徒兵に志願して陸軍兵士として中国に送られたが、隙を見て脱営し、中国の地で朝鮮人の独立軍に加わって活動した不屈のひとだった。

歴史的現実を直視せず、時代精神を欠如した大学は生命力を喪失する。そんな大学は学歴社会で生き残るために利用されることはあっても、尊敬されることがない。私は約10年間韓国に滞在して1993年3月に帰国したが、日本では多くの学生たちが晴れ着姿で喜々として卒業していく風景に、いまま違和感を覚えてしまう。大学の教員たちは我が身をもって学生たちに何を示すことが出来ているのだろうか、沈み込んでしまうのである。

反独裁民主化闘争では、大学構内でも集会・デモがしばしば行われた。私が高麗大学に留学したとき(1983年9月)、正門から大学構内に突入を試みる戦闘警察のフォッグ車(催涙ガスを噴射する真っ黒の装甲車)に対して投げつけられた2,3本の火炎瓶が命中し、学生たちは歓喜の雄叫びを上げた。全斗煥軍事独裁政権下で押さえつけられていた学生運動が再び活性化しはじめたころの象徴的な場面だった。権力の目を盗んで学内に持ち込まれた3,4センチ四方の小さなビラが図書館の階段から紙ふぶきのようにまかれるのも目撃した。警察による校門での持ち物チェックを欺くため、女子学生がスカートの下に隠して持ち込んだというのがもっぱらの噂だった。警察が駆け付けるまでの時間が稼げる屋上から、身を乗り出して演説する学生も見た。ロープで屋上から宙吊りになって演説をする学生もいたと聞いた。

デモの隊列を組もうとする学生たちを蹴散らしてキャンパスを制圧した数十人の私服たちが、意気揚揚と隊列を組んで行進するブラックユーモアな姿も見た。私服の若者たちも一度「デモ」をやってみたかったのだろうか。デモが起こりそうなときは、学生風を装った私服が大量に投入された。事前検挙を避けるため、学生運動の指導部はデモ決行の日時を極秘にしていた。また、目をつけられた教員の講義には、情報部員が紛れ込んでいたとも言われる。私と親しかった韓国外大の学生は、教務課の事務室に常時、情報部員のための机が一つ置かれていると、嘆かわしように私に教えてくれた。

韓国外大のキャンパスでは、軍事教練を受ける学生たちが行進する隊列と、学生たちのデモの隊列が交叉したあと、軍事教練中の学生たちの歌声が軍歌からデモ隊の歌に変わるのも見た。1986年、1987年頃になると民主化闘争は激しくなり、韓国外大でも毎週のように集会・デモが行われた。あでやかにチマ・チョゴリ、パジ・チョゴリを身にまとった学生たちが鉦太鼓を叩きながら先導して学内デモが繰り広げられ、正門から街に繰り出そうとすると、阻止線を張った戦闘警察が催涙弾を浴びせかけ、学生たちは投石と火炎瓶で応酬した。韓国外大のキャンパスには敷石がないので、ブロック塀を壊して投石した。デモが終わると、キャンパス裏手のブロック塀の一面は細い鉄骨だけを残すだけになった。大学は直ぐにブロック塀を補修したが、1

週間後にはまた鉄骨だけになった。こんなことが何度も繰り返された。大学も学生側に立っているのではと勘繰ってしまうような光景だった。キャンパスの奥の方には「火炎瓶製造所」と張り紙がされたところに焼酎やビールの空き瓶、ガソリン、ぼろ布が置かれ、正門で闘う学生たちに火炎瓶を運ぶ姿まであった。日本では火炎瓶を投げると「極左暴力集団」と罵倒されたが、韓国の学生たちの間ではそんな声はほとんど聞かれなかった。激しいデモが予想された日は、教員に待機命令が出た。本館2階の教授控え室では、誰もみな黙り込んだまま、あちこちで碁を打つ音だけが聞こえた。私の授業に出ていた愛すべき学生は、「先生すみません。今日の午後は授業に出られません。デモに行くんです」と言ったきり、帰ってこなかった。

激しい街頭デモが予想されたある日、繁華街の鍾路に出てみた。歩道にはぎっしりと戦闘警察が立ち並び、学生風の青年を呼び止めてカバンを開けさせ、本をペラペラめくってはビラでも隠し持っていないかと検問をしていた。その時、私は語学留学でソウルに来ていた猪瀬泰美氏（当時、東京大学学生）と一緒にいた。彼は案の定、検問に引っ掛かった。彼はわざと日本語で「なんですか、なんですか」と大きな声で戦闘警察に喰ってかかった。困った隊員は、「誰か日本語が分かる奴いないか」とまわりに声をかけていた。猪瀬氏は仏文科の学生だったが、フランス語は「耳からこぼれ落ちるぐらい聴いていたら、そのうち口から出るようになった」と愉快的言い方をした。また、表に朝鮮語の文章、裏に日本語訳を書き込んだ長細い自家製カードの束を真っ黒になるまで繰り返しめぐりながら、「クマタニさん、これ覚えたら話せるようになる」と言っていた。6か月経って帰国するころ、彼は誰かと朝鮮語で電話をしていた。帰国後、新聞社と通信社と放送局からの採用通知を手にしたが、彼は放送局に入社した。

反政府闘争が最高潮に達した1987年6月中旬、全国的に収拾のつかない事態に発展していた。大田でも激しいデモが起こって戦闘警察が死亡する事態に発展し、私は今にも軍事クーデターが起こるのではないかと危惧した。戦闘警察が死亡した次の日、何の連絡もなしに日本大使館の政務担当公使が私のアパートを訪ねて来て、1時間ほど話し込んで帰って行った。政務担当公使は大使に次ぐ要職だが、彼は東大言語学科卒業という変わり種で、あることで知り合いになっていた。「いま、こんなところに来ていいのですか。クーデターが起こると思うんですが」と言ったところ、「要所要所に情報収集のために人を派遣してあるからだ大丈夫だ。いまヨイド（汝矣島。漢江の中州で、国会議事堂や放送局がある島）には、軍のトラックが数十台集結している。軍は大量の兵士をソウル中心部に投入できる体制を整えている」などと、私の予想を裏切らない言葉を返した。のちに、当時アメリカの駐韓大使だったジェームズ・R. リリー（James R. Lilley）が書いた『チャイナハンズ—元駐中米国大使の回想 1916-1991』（草思社、2006年）で、この時アメリカは全斗煥大統領と盧泰愚民主正義党（与党）総裁に対して、クーデターを思い止まるよう必死の工作を展開していたことを知った。この本にはクーデターを阻止するためのアメリカの動きが詳細に描かれている。私が危惧した通りだった。昨年秋、陸軍特殊部隊で兵役について経歴を持つ権寧俊氏（新潟県立大学教授）と話す機会があった。1987

年6月中旬には権寧俊氏の部隊に出動待機命令が出ていて、緊急出動に備えて就寝時も軍靴を履いたままだったという。ややもすれば、権寧俊氏は第2の「光州事件」の下手人ともなりかねなかった。

1987年8月下旬、慶尚南道巨済にある玉浦大宇造船では労働争議が紛糾し、労働者が造船所を占拠していた。私は、大阪外大の波佐場清先輩（当時、朝日新聞ソウル支局特派員）から取材協力の依頼を受け、現地取材に同行した。私たちはヘリコプターで金海空港から巨済に入った。8月22日のデモで催涙弾のために労働者（イ・ソクキュ氏、21歳）が死亡し、緊張が高まっている時だった。遺体が安置された造船所敷地内の玉浦大宇病院霊安室の鉄の扉は溶接されたうえコンクリートで塗り固められ、その前はフォークリフトでふさがれていた。葬儀のやり方を巡って、労組側と遺族側の意見が一致せず、その隙を狙って権力側が遺体を奪取しに来るかも知れないと思われていた。のちに大統領になった盧武鉉（ノ・ムヒョン）弁護士はこの争議の部外者でありながら、葬儀と労働争議に介入したとして、1988年2月に有罪判決を受けている。また、この裁判では、文在寅弁護士（現大統領）を含む多人数の弁護団が組織されていた。

大宇造船所は角材などで武装した労働者たちによって、完全に占拠されていた。労働者たちはあちこちで屋外集会を開いていたが、歌っている労働歌は流行歌の替え歌だった。中卒などと履歴を偽装して労働現場に潜入した大学生や大卒者たちは、このようにして労働運動を組織してきたのだろう。

「외신」(外信)と染め抜かれた腕章を見た10人ほどの労働者が一斉に駆け寄って私を取り囲み、口々に「わが国の新聞は書いてくれない。書いてくれ、たのむ。月給は〇〇万ウォンだ。盆正月のみやげも買えないから親の家に帰れない。」と必死に訴えた。記者控室に座っていたとき、与党の政治家たちがいきなり入ってきて、「スゴハシムニダ！（ごくろうさまです）」と艶のある声を発しながら、何十人もの記者一人一人に封筒を配り始めた。その時、一人の日本の外信記者が大声で叫んだ。「俺たちは、そんなもん貰いに来たんじゃない！」と。

1980年代、全斗煥（チョン・ドゥファン）軍事独裁政権打倒の闘いで重要な一翼を担った学生運動は、大きく分けて自民闘（反米自主化反ファッショ民主化闘争委員会）と民民闘（反帝反ファッショ民族民主闘争委員会）の2派に分かれていた。しかし私が知る限り、日本のように路線の違いを巡って凄惨な内ゲバが起るようなことは決してなかった。自民闘は金日成の主体思想を指導理念とする親北朝鮮路線をとったので主体思想派（主思派）とも呼ばれた。高麗大学国文学科の学生たちは主思派一色だった。主思派は全大協（全国大学生代表者協議会）を掌握し、1989年にピョンヤンで開かれた第13回世界青年学生祝典に韓国外大仏文科の女子学生林琇卿（イム・スギョン）氏を代表として秘密裏に派遣した。当時全大協議長だった林鍾哲（イム・ジョンチョル）氏はこのために逮捕され、実刑5年の判決を受けて下獄した。現在、林鍾哲氏は文在寅（ムン・ジェイン）大統領の右腕たる秘書室長に抜擢されており、これは文

在寅政権の対北朝鮮政策を象徴的に示している。主思派はNL（national liberation）派とも呼ばれていたように、反共主義国家韓国の国民的な反発を買わないよう、社会主義理念ではなく民族主義を前面に押し出した北朝鮮の対南戦略に呼応する民族統一運動を展開してきたのであり、現政権もその延長線上にあると思われる。

3階建ての韓国外大本館左側の壁面全体に、林琇卿氏がピョンヤンを訪問したときの雄姿が何者かの手によってどでかく描かれたが、どうしたわけか大学は何日も消去しなかった。当時、私は韓国外大に勤務していたが、「労働新聞」（朝鮮労働党中央委員会機関紙）の記者団が韓国外大に取材入りし、「豆点（報道）」と染め抜かれた赤い腕章姿の記者やカメラマンたちが、この壁画を撮影するなどキャンパス内を大急ぎで駆け巡っていた。林琇卿氏はピョンヤンに入ってから46日後に板門店を歩いて通過して韓国に戻り、逮捕された。彼女は公々然と休戦ライン（DMZ）を歩いて越えた最初の民間人となった。軍事境界線も未来永劫に続くものではないと思わせる出来事だった。反共主義国家ではあるが、市民の反応は林琇卿氏らの行動に対してさほど冷たくはなかった。のちに、林琇卿氏は国会議員にもなった。

軍事独裁の時代は、特に思想統制が厳しかった。毎晩ニュース番組の冒頭、画面いっぱい、全斗煥大統領の顔がアップで映し出され、「クンミン ヨロブン！（国民の皆さん）」と話し始める姿を、いつもおぞましい思いで眺めた。今日一日、余計なことを口にしなかつたらどうかと、思わず「反省」するのだった。当時、韓国の大学教員は秘密裏に情報部のチェックを定期的に受けており、教員として不適切だと判断が下されると、理由も知らされることなく、また尋ねることも許されないまま、大学を追われた。そんな恐怖が大学を支配し、自由な思考が自己規制されがちだった。学長も政権によって任命されていた。

そんな頃、「学生がデモをする時、熊谷先生はいつもそばにいる」と某教授が話しているという噂を耳にして、私は不安な思いに駆られたことがある。

またある時、韓国外大のM教授が日本語の仕事をしなかと声をかけてくれた。どこで教えるのですかと尋ねると、もごもごしながら「黒塗りの乗用車で送り迎えしてくれるところだ」と言った。情報部（国家安全企画部）のことだった。プロの情報部員がどんな人たちが知りたい気持ちはあったが、「そんなところで教えていることを学生が知ったら、学生たちから信頼されなくなる」という理由でお断りした。また、韓国の日本語学会の重鎮だった世宗大学のT教授に誘われて経済関係の政府機関で教えたことがある。何か月か経ったころ、このことを知っているはずもない日本語学科の学科長に呼び出され、「アルバイトをやりすぎだ」と注意を受けた。この背景に何があったのか私にはわからなかったが、最後に「アラソ ハセヨ」（「よく考えてください」??）と学部長が放った一言が何を意味するのか判断できず、頭を悩ませた。

1986年8月、NHK大阪放送局とKBS釜山放送局が協力協定を結ぶため、NHKのスタッフが韓国にやって来た。私は1週間、随行通訳としてソウルと釜山を回った。ホテルの一室でNHKスタッフが会議をしていた時、話している上司の存在を無視するような格好で部屋の隅っ

こにうづくまる人がいた。あとでその人から聞いた話だが、アフリカでゲリラにつかまったり、ゲリラたちは日本という国を知らないので地図を持ってこさせて説明をしようとした。ところが、アフリカが中心に描かれた地図で日本が載っておらず殺されそうになったところ、ゲリラの頭目のような人間がやってきて理解を示し、殺されずに済んだという話だった。その話を聞いて、彼の身のこなしようが納得できた。

また、ある人はKBSの記者とサシで一晩飲み明かして帰ってきた。意気投合した二人は、「お前と俺は一心同体だ」ということになり、KBS記者が言うままに、パンツ以外はすべて交換してきたという。確かに彼はぶかぶかの背広姿だった。彼は「時計は俺のものがもっと上等だ。損した」と、悔しがった。実に韓国らしい、はちゃめちやな付き合いをやったものだ。酔っ払っていたとはいえ、その気風の良さは立派なものだと感じ入った。

韓国外大には同時通訳者養成のための大学院が設置されているが、政府の手厚い支援のもとに設置(1979年)されたもので、私は毎週1コマの授業を9年間担当した。設置されてから数年間は、「韓日科」に入学してくる院生は毎年1人、あるは多くても3、4人ほどの少数精鋭だった。ほとんどの院生は青少年期に日本で暮らしたニア・ネイティブで、これを同時通訳専門家として磨き上げる教育機関だった。彼らは、今までテレビ媒体や外交で重要な仕事をこなしてきた。大切なことは、養成する同時通訳者の人数の多寡ではなく、いかに傑出した同時通訳者を輩出するかにある。使えない人材をいくら輩出しても意味がない。韓国外大での同時通訳者養成課程は、実に優秀な人材を輩出してきた。経済的採算性を度外視しなければ、こうした人材育成は不可能だろうし、この点では日本の大学教育は韓国に後れを取っているように思われる。

1988年11月、私は金容沃(キム・ヨンオク。当時、高麗大学哲学科教授)氏の『女とは何か』(原題は『여자란 무엇인가』)を翻訳出版した。この本は金容沃氏が1986年4月8日朝の講義「東洋哲学入門」で、「良心宣言」を学生たちの前で読み上げて、大学に辞表を提出したあと書かれたものである。「良心宣言」は次のように、時代の痛みを切々と学生たちに訴えかけた。「胸が痛むという私の素直な感覚すらも口に出せない社会が、どうして私たちが共に目指している社会の姿だと言えるでしょうか?誤りを誤りだと言えず、改めるべきことを改めなければならないと言えず、つらいことをつらいと言えないそんな現実の中で、私は皆さんから尊敬される学者の一人として、もはやこれ以上教壇に立つことが出来ないことを告白します。……愛する弟子の皆さん。みなさんを最後まで屈することなく守ろうとする決心を崩し、決断を下すしかない私自身のいくじなさに、またもや胸が張り裂ける思いを抱きつつ、ただ、ひ弱にしか自分自身の良心を守ることが出来ない普通の人の姿を、再びのろいます。……私は、私の辞職の深い意味が皆さんに伝わることを願います。みなさんはこの時代の知性人として知性人らしい行動を放棄してはなりません。必ずや、立ち上がった教授たちにこの時代を導いていく使命を果たしうる時間を与えなければなりません。そして、暴力は暴力によって解決されるもの

ではありません。より大きな暴力だけが残ることになるでしょう。暴力は暴力自体が持つ力によって滅亡するでしょう。みなさんは未来の担い手としての資質を養う、高水準の文化を修練することを怠ってはなりません。そして、現実に対する絶望のあまり、未来に対する確信までも打ち捨てるようなことがあってはなりません。……いつの日か、この地に暮らす私たちすべてが、イデオロギーや虚勢の衣を脱ぎ捨て、同じ思いで出会える日があることを確信します。」

辞職という究極の決断をもって、軍事独裁政権下における知識人の苦悩を告白した金容沃氏は、韓国社会に大きな波紋を投げかけた。私は金容沃氏のような知識人との出会いを通じて、韓国の知識人の悩みと深みに接した。ある日、金容沃氏が「明日、慶熙大学でやる僕の講義を見に来ないか」と電話をかけてきた。漢医学科の講義で100人ほどの学生が階段教室に集まっていた。教室に現れた金容沃氏は教卓の前で、蒼白な顔色で全身をこわばらせたまま立っていた。ながい沈黙の後、いきなり腕に抱えていたレポートの束を床に投げつけ、靴先でバラバラに蹴散らした。そして、「君らの中で、おれの講義をまともに聞いている奴は一匹もいない」とどなるのだった。一人の学生が床に散らばったレポートを拾い集めた。講義が終わり、レポートが学生たちに返却された。覗き見ると、どのレポートにも赤ペンでコメントが書き添えられており、学生たちの顔はほころんでいた。金容沃氏は、韓国社会ではカリスマ的存在となっていた。彼は学生のレポートはたとえ千枚であろうとすべて読み、どれだけ時間をかけて書かれたものかを判断して評価を下すのだと、どこかの本に書いている。ところで金容沃氏はなぜ、あのとき私を講義に誘ったのか、今でもその真意を測りかねている。

韓国外大に勤務している間、私は東亜日報、朝鮮日報など4紙か5紙を常に購読していた。これらにざっと目を通しておくと、学生が持ち出す話題の出所と考え方が分かることがよくあった。朝鮮研究者たちは日本語教育のプロでないため、効率的に日本語を教授する点では及ばない点が多々あるだろう。一方、朝鮮語が分かっているのも、韓国人の日本語学習上の弱点が把握しやすく、誤用の原因も推察しやすい。さらに、韓国社会の現実に立脚した対話ができる点において、朝鮮研究者の方が優れている。韓国のように、日本に対する微妙な民族感情が張りつめた世界では、琴線に触れる日本語教育が求められるのである。

いよいよ韓国外大を辞職することになったとき、私は退職金の受給額が気になり労働法規に基づいて試算してみた。その後、大学の事務室に行って退職金の金額を尋ねたところ、すでに計算されていた。その金額は私の試算とは非常に大きく異なっていたので、再確認を要求して事務室を出た。実はその前の年、ロシア人教授が不当に低額の退職金しか支払われず、泣き泣き帰国したという噂を耳にしていたのだった。当時、私は韓国最大の弁護士会計士事務所「キム アンド チャン」でトップの位置にある金永珪（キム・ヨンム）国際弁護士にアルバイトとして雇われ、日本語の個人教授をしていた（金永珪弁護士の日本語はとても流暢だったが、私との会話で、その能力の維持向上を図っておられた）。金永珪弁護士にそのことを話したところ、部下を呼び付けすぐ確認するように命じた。間もなく、私の試算には問題がないと報告さ

れた。そして、金永珪弁護士は「私が大学に電話を1本かければ解決する問題だから、心配しなくてもいいです」と私を安心させてくれた。後日、大学の事務室から私の試算金額が正しいとの回答ももらった。こんな人為的ミスはあったけれども、私を受入れ、長く勤務させてくれた韓国外大の方々への感謝の念は今も変わらない。

日本では2019年4月から外国人労働者を多数受け入れる政策が急ぎよ実施されることになり、今後日本語教育に対する需要が増えていくだろう。しかし、この政策のもとで日本語教育が低賃金外国人労働力確保のための手段に成り下がることが懸念される。日本語教師自身がそうした問題意識を持つのも重要なことである。少なくとも、大学における日本語教師養成課程では、効率的な教授法に力を注ぐだけではなく、外国人労働者の権利を擁護する角度からも日本語教育のあり方が検討されなければならない。低賃金労働力確保という経済界からの要請に無批判的に従うなら、本来大学が果たすべき使命を喪失する。1960年代末の全共闘運動では「大学解体」なる過激なスローガンも掲げられたが、搾取構造の社会において搾取る側に奉仕する大学に転落してはならないとしたその根本理念は、大学の存立意義を失わないために忘れられてはならない。

再び金永珪弁護士の話だが、金弁護士は日本語も流暢だった。毎朝週2回、タクシーで執務室に行き、電話の受け答えなどの仕事をされる間のわずかな空き時間に日本語で会話をするだけで、1時間のうち、ただ座っている時間のほうが多かった。1年間続けたが、世間相場とはおよそかけ離れた高額の報酬を毎月いただいていた。あるとき、金弁護士は、「この事務所（大きなビル全体）の資料室の半分以上は日本の図書資料ですが、なぜだか分かりますか」と私に尋ねた。私が返答に窮していると、「日本社会の価値観は韓国によく似ているからです。とても参考になるのです」とだけ話した。私は今なら、この質問に返答できるだろう。大韓民国憲法（1948年7月17日）第10章附則第100条において、「現行法令はこの憲法に抵触しない限り、効力を有する」として、大韓民国建国（1948年8月15日）後も、日本の法令を朝鮮語に翻訳して「依用」（他国の法をそのまま適用すること）し続けた。たとえば、1959年末日まで日本の民法を依用し、商法は1962年まで日本の商法を依用していた。つまり、植民地時代から半世紀以上にわたって、韓国は日本の法体系のもとにあったからである。今はどうか知らないが、私が韓国にいた当時、司法試験合格者に対する長期研修では、日本語は必修科目だった。

1960年代末からの第2次安保闘争、全国学園闘争、成田闘争で盛んに火炎瓶が投げられたため、1972年4月に「火炎瓶の使用等の処罰に関する法律」が制定された。韓国では1989年にこれを逐語訳した条文からなる「火炎瓶의 使用等の 處罰에 關한 法律」が制定されたように、日本の法体系は今日でも常に参考にされている。このことは、拙稿「朝鮮語の近代化と日本語彙」（『関西大学人権問題研究室紀要』67号）に書いておいた。

韓国では、「朝鮮」「朝鮮語」という語は、「朝鮮日報」「朝鮮ホテル」などの固有名詞や「朝鮮王朝」のような歴史用語を除けば、一般的にkoreaを表す語としての使用は禁止されている。

1980年代後半期、韓国外大で「朝鮮民主主義人民共和国」と正式国名を書いた壁新聞を学生が張り出したとき、これを弾圧するため催涙弾を打ちながら学生を蹴散らし、キャンパスの奥深くまで戦闘警察が投入されたことがあった。また、ソウルの書店で販売される日本書籍は、「朝鮮民主主義人民共和国」と印刷された部分だけ、マジックインキで墨塗りされたものが売られていた。

ある日、『朝鮮語大辞典』（大阪外大朝鮮語研究室編、角川書店）の不法コピー本を売りに、釜山のヤミ出版業者が韓国外大の私の研究室を訪ねて来た。私はこの辞典の編纂協力者であることを話し、「一体、誰に売りにきたのだ！」と皮肉を言ってやった。この業者の男性は、情報部で一晩泊められて尋問され、ひどい目にあったことを話した。その理由は、この辞典に「朝鮮民主主義人民共和国」の正式国名が載っているからだった。

ところが、南北朝鮮が国連に同時加盟した1991年9月17日、夜7時のKBSテレビニュースは「きょう、わが大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国はUNに同時加盟しました」とアナウンスした。これが、私が「朝鮮民主主義人民共和国」という正式国名を韓国のテレビやラジオで聞いた最初で最後のことだった。その後はまた「プッカ（北韓）」に戻った。民主化闘争勝利以前は憎しみを込めて、もっぱら「プッケ（北傀）」（「北韓傀儡集団」の略称）と呼ばれていた。

ところで、韓国で「朝鮮」という用語使用が禁止されたのは、次に示す「国号および一部地方名と地図の色の使用に関する件」（1950年1月16日付 国務院告示第7号）が告示されてからだった。

1. わが国の正式国号は‘大韓民国’であるが、使用の便宜上‘大韓’または‘韓国’という略称を用いることが出来るが、北韓との画然とした区別をつけるために‘朝鮮’は用いることが出来ない。
2. ‘朝鮮’は地名としても用いることが出来ず、‘朝鮮海峡’、‘東朝鮮湾’、‘西朝鮮湾’などは、それぞれ‘大韓海峡’、‘東韓湾’、‘西韓湾’などに改めて呼ぶ。
3. 政治区分地図においては、わが国の色は緑色とし、赤色は使用できず、わが国の色を明確に表すために、隣の中国は黄色、日本は桃色、ソ連は紫色とする。

植民地時代末期、朝鮮語の規範化とその普及を図っていた朝鮮語学会は民族独立を企てたとして弾圧され、治安維持法違反で10数名に実刑判決が下され、2名の獄死者を出した。しかし、1945年8月15日以後も「朝鮮語学会」の名称のまま学会活動を再開し、1947年に刊行した朝鮮語辞典のタイトルも『조선 말 큰 사전』^{朝鮮 ことば おおきな 辞典}（「朝鮮語大辞典」）第1巻だった。また、「朝鮮」「朝鮮語」という語が「日帝支配の残滓」であり、「廃棄すべき用語」だと早くから認識されていたなら、反帝・社会主義を国是とする北朝鮮で用いられ続けるはずもなかった。

「朝鮮」が普通に用いられた別の例として、南朝鮮での単独選挙実施にあたって京畿道江華郡選挙管理委員会委員長名で出された公文書「政府樹立의 礎石인 總選舉에 對하여」(1948年)の冒頭部分(ルビは熊谷による日本語訳、太字は熊谷による)を紹介しよう。

「今般施行되는 總選舉는 朝鮮人代表를 選出하여 民主朝鮮中央政府를 樹立하기爲함이다。この 總選舉는 南朝鮮單獨政府를 樹立하여 朝鮮을 南北으로 分割하야는 것은 아니다。この 總選舉의 目的이야 말로 三八障壁을 撤毀하고 朝鮮統一을 成就케 하는 基礎가 되는 同時에 우리가 民族의 自由意思에 依한 投票로서 國會에 參與할 代表者를 選出하고 이國會에서 憲法을 制定하야 國權을 建立하는 가장 重要한 業務임으로 ……」

1948年8月15日に建国された韓国では、1950年1月の「國務院告示」以後、「朝鮮語」という用語使用が禁止され、「韓国語」に置き換えられたことを契機に、言語名称に南北分断が持ち込まれた。民族語である朝鮮語の名称に政治的境界線を持ち込んだのは韓国だった。これは北朝鮮に対抗して、韓国の独自性を主張する(つまり、異質性を強調する)分断思想の発露でしかなかった。もともと、解放後も南北を問わず「朝鮮語」と言っていたものを、韓国側で「韓国語」という言語名称に変更し、ここから言語名称の南北分断が固定化してきたわけである。南北間で言語名称を異にするようになったとはいえ、南北朝鮮の朝鮮語は、互いに意思疎通に大きな障害をもたらすほどの違いはない。筆者自身、北朝鮮で1週間過ごし、当地の人々と会話をしている間、意思疎通に障害を来すことはほとんどなかった。南北間で会議が開かれるときも通訳などつけておらず、言語そのものの次元からは南北間で言語名称を異にする必要性はまったくない。つまり、ひとえに政治的理由から言語名称を異にするようになったのであり、その発端となったのは「國務院告示第7号」発布を通じた韓国政府サイドからの積極的な「異質化」措置だった。

この結果、今日の韓国では「チョソノ(朝鮮語)」という朝鮮語の語彙は「北朝鮮の言語」、あるいは「植民地時代に日帝が勝手に採用した言語名称」であるから用いるべきではないと思われているが、これは多分に北朝鮮への政治的対抗意識から後付けられた認識である。漢字語「朝鮮語」を、日本語で「ちょうせんご」という時と、朝鮮語で「チョソノ」という時では、異なる意味ニュアンスを持つ。多くの韓国人は、日本語の「ちょうせんご」を「チョソノ」の意味で理解し、深い不快感を示す。これは、「ちょうせんご」の意味が理解できないことに起因している。日本語と朝鮮語は漢字語の語彙を有するうえで共通しているが、しばしばこうした深刻な誤解をもたらす。ある時、タクシーの中で韓国外大の教え子と朝鮮語で話していた時、「先生はパルバンミイン(八方美人)ですね」と言ったので不快になって怒ったところ、同乗していた韓国人老教授が「彼が言うパルバンミインというのは、あらゆる面で優れているという意味なのです」と、私の誤解を正したことがあった。

京阪神の大学では、関西大、大阪大、大阪府大、大阪市大、京都大、京都府大、立命館大、神戸市外大、関学大などで「朝鮮語」を科目名称としている。また、同志社大、龍谷大では「コリア語」としている。地理的名称として「朝鮮半島」、民族名称として「朝鮮民族」と称するのと同じく、「朝鮮語」は政治的境界をまたいだ文化的概念を表している。したがって、「朝鮮語」の方が「韓国語」より政治的にニュートラルな呼称であって、南北分断の政治状況を言語教育に持ち込まないものである。日本では韓国人研究者が専任教員として採用されているケースが少なからずみられ、韓国の国家的立場から日本の大学における朝鮮語教育に政治的境界線を持ち込もうとする傾向がみられる。これは、韓国人教員によって日本の大学教育の主体性を歪めるものである。朝鮮半島の政治状況に追随することなく、朝鮮民族・朝鮮語総体を対象とする日本における朝鮮語教育の基本理念は、揺るがしてはならない。

私は韓国外大で日本語の授業をする時、「ちょうせんご」という語を多用していた。それは、学生たちが日本に行ったとき「ちょうせんご」と言う日本人は「植民地支配の歴史を反省しない悪い人」、「北朝鮮側に立つ人」と誤解しかねないからである。だから、私は韓国の学生たちに、「私は、日本のことをごまかさないで教えているのだ」と言い続けた。韓国外大の紀要や研究誌に日本語で論文を書くときは、「韓国語」ではなく「朝鮮語」という用語を一貫して用いたが、クレームがついたことは一度もなかった。

日本語で「韓国語」という言語名称が広く用いられ始めたのは1965年の日韓国交回復のあとのこと、1970年代以後のことだと思われる。

1984年からNHKは「アンニョンハシムニカ ハングル講座」を始めたが、このテレビ講座とラジオ講座が開始されるに至った経緯を少し紹介する。以下は、私がかつてNHKが朝鮮語講座を開講する過程で中心的に関与していた荻野吉和氏（当時、NHK大阪放送局副局長）から直接聞いたことである。ネットではいろいろな憶測が書かれているが、以下に紹介することが事実だと考える。つまり、朝鮮語講座開設を求める市民運動を背景に、NHKは「朝鮮語講座」開講を決定し、経営陣もNHK労組も「朝鮮語講座」のタイトルで開講することに同意していた。開講を前にして、あるNHK職員が「朝鮮日報」東京特派員に「オフレコ」を前提にこのことを話し、反応を見ようとした。ところがこの特派員は「オフレコ」の口約束を破り、翌日の朝刊1面トップに、“NHKは「朝鮮語講座」を始める”ことをすっぱ抜いた「特ダネ」を掲載したのだった。この後、韓国サイドから強烈な抗議が殺到し、やむなくNHKは4名の朝鮮語研究者（全員、日本人）を招いて対応策を協議し、「朝鮮語」でも「韓国語」でもない「ハングル」を言語名称に決め、開始予定を6か月遅らせて「アンニョンハシムニカ ハングル講座」の放送を開始した。巷ではいろいろな憶測が飛び交っているが、以上が筆者が知る限りでの経緯である。日本語で言う「朝鮮語」という用語の意味を政治的に曲解し、「韓国語講座」への講座名変更を強要しようと企んだのは韓国サイドだった。

韓国サイドからの政治的干渉への対応策を協議するなかで、「証城寺の狸ばやし」のメロディ

ーに乗せた「カムカム、エブリバディ」のテーマ曲 (“Come come everybody ; How do you do and how are you ……”) で始まる戦後期のラジオ講座「カムカム英語」(講師：平川唯一) からヒントを得て「アンニョンハシムニカ」がタイトルに加わったと、会議に出席していた先生から私は聞いている。その後、2008年度から「テレビでハングル講座」、「まいにちハングル講座」(ラジオ) にタイトルが変わった。

日本で刊行される朝鮮語テキストのほとんどすべてが、「ハングル」は「偉大な文字」という意味だと誤った説明をしている。しかし、高永根氏(コ・ヨングン、ソウル大学名誉教授)は、「ハングル」という用語は1914年頃に現れた朝鮮語学者周時経(チュ・シギョン)による造語であり、その語源が「韓(ハン)の文字・文(クル)」であることを詳しく論証した。「韓文」と「漢文」は朝鮮漢字音では同じになるので、混同を避ける意味でも「韓文」の「文」を朝鮮固有語の「クル」に置き換えて「ハン(韓)グル」とされたのだった。しかし、この「韓」は分断国家の片割れである「大韓民国」のことでは決してない。なお、朝鮮語の無声音[k]は有声音〈母音・n・m・ŋ〉のあとで[g]に有声音化するので、「ハングル」は「ハングル」と発音される。

さらに「ハングル」の「ハン」が「正、大」を意味するというのは、「大きい」という意味の古語「ハダ」の連体詞形「ハン」と一致するために、のちに拡張解釈されたものである。このようなやり方の意味解釈は、ややもすれば次世代に国粋主義思想を吹き込みかねない点で、望ましい態度ではない(「ハングル」の命名者は誰か『새국어생활』第13巻第1号、2003年春)と辛らつに批判している。私たちは、「偉大な文字」という事実に基づかない、韓国サイドの国粋主義的な「ハングル」の語源解釈^{ついでしょう}に追従してはならない。

朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)では1947年までは「ハングル」という用語を用いていたが、1948年1月に公布された「朝鮮語新綴字法」では「朝鮮文字」^{チョソンムンチヤ}と呼び変え、この綴字法に基づいて書かれた『朝鮮語文法』(朝鮮語文研究会、ピョンヤン、1949年10月)でも「朝鮮文字」と書かれている。筆者は、在外研究で中国に滞在した時、この『朝鮮語文法』を延吉市内の古本屋で入手した。この本はアメリカのNational Archivesに、朝鮮戦争のとき米軍が鹵獲した(かっぱらった)ものが数冊(7冊前後だったか)所蔵されているのを確認した。

北朝鮮が「ハングル」を「朝鮮文字」と言い換えたのは、「ハングル」の「ハン」が「大韓帝国」の「韓」であり、古代南部朝鮮にあった部族国家「韓」ともつながり、更に「韓国」の「韓」を連想させるからだった。しかし、NHKが「ハングル講座」と決めるとき、北朝鮮が抗議の声を上げなかったのは、この点に関して言えば韓国に比べて良識ある姿勢を示したものと、私は評価している。

「ハングル」は言語名称ではなく、朝鮮文字を指す用語だという批判がなされている。しかし、日本の敗戦後しばらくの間、旧満州の間島地方(いまの延辺朝鮮族自治州)の初等教育における朝鮮語科目名称は「ハングル」で、この「ハングル」は「朝鮮語」を意味していた。そ

の後、中国の朝鮮族学校での科目名称は「朝鮮語」、「朝鮮語文」と変遷してきた。このようなことは日本ではあまり認識されていない。私は延吉市内の古本屋で、1940年代後半期の古ぼけた教科書『ハングル』を2冊入手し、大切に保管している。

「ハングル」という用語が「朝鮮語」の意味でも用いられたのは、1945年解放後の南朝鮮でも同様だった。朝鮮語学会事件で検挙され、咸鏡刑務所で獄死した李允宰（イ・ユンジェ）の遺稿をもとに編纂された『標準 朝鮮 ^{ことば} 辞典』が刊行されたのは、大韓民国建国直後の1948年11月15日だった。ところが、朝鮮語学会機関紙『한글(ハングル)』第12巻3号（1947年7月15日）には、この辞書の広告が「印刷中」として掲載されており、その書名は『標準 ^{ハングル} 한글辞典』だった。大韓民国建国後に、当初予定された書名「ハングル」が「韓国語」ではなく「朝鮮語」に変更された点も注目される。この他にも当時、『한글文藝讀本』（1946年）や「国民校上級用国語実力拡充教材」として『小學文藝 ^{ハングル} 한글讀本』（1947年）が刊行されるなど、「ハングル」という用語は「朝鮮語」の意味でも使われていた。いつ頃から「ハングル」が朝鮮文字だけを指すようになったのか、その歴史的考証は未だなされていない。

私は6か月間だけNHKラジオの「ハングル講座」の講師を担当したことがある。他の言語講座とは違って「ハングル講座」だけは、講師は「この言語では……」などと歯切れの悪い説明をしていた。私は担当ディレクターに「はさみで録音テープをちょん切らない」ことを確認し、2度だけ「朝鮮語では……」と話してみたところ、その通り放送された。後日、ある学会からの帰り道、電車で出会った顔見知りの在日朝鮮人が、「放送聞きましたよ」と嬉しそうに声をかけてきたことがあった。父母はラジオを買ってきて、聴いてくれていたことを後で知った。

センター入試の外国語科目は「韓国語」だが、これはソウルで開かれた日韓外相会談の場で、センター入試に「韓国語」科目を追加してほしいとの韓国側からの要請を受ける形で検討が始められたことになっている。しかし、城内実氏（当時、外務省職員。現在、衆議院議員）は、次のように当時の舞台裏を明かしている。

「1998年10月に訪日した金大中大統領（当時）に花を持たせようと、私は外務省の担当者として文部科学省と調整し、大学入試センター試験の科目に「韓国語」を新たに導入させることに成功しました。日韓友好を深めるべく、「良かれ」と思ってセンター試験改革を敢行したのです」（私が日韓議連を辞めた理由）『正論』平成31年（2019年）3月号、産経新聞社）

外務省専門職員採用試験外国語科目の名称は当時も今も「朝鮮語」であるのに、韓国側に花を持たせるために韓国の外務部長官（外務大臣）から要望を出させる形にして、「韓国語」にしてしまった。「日韓友好」のために、韓国に対して政治的にすり寄った結果だった。日本の外交や教育行政の主体性が疑われる出来事だったと言わざるを得ない。

1977年4月に東京外国語大学に朝鮮語学科が設置されたが、設置後しばらくして東京の韓国大使館は「韓国語学科」に改称することを求めた。しかし、東京外大当局は韓国側からの不当な政治的干渉だとして、まったく相手にしなかった。このときの経緯を、菅野裕臣氏は以下のように回顧している。なお、この文章は『東京外国語大学百周年記念論文集』（1999年）所収の文章に、菅野氏自身によって若干の修正と加筆が施され、インターネット上に公開されたもの。

「学科発足の初期に客員教授が是非自分のために大使館にいっしょに行ってくれと言う。大使館側は朝鮮語学科を韓国語学科と変更するよう激しく要求した。その話を聞いた当時の庶務課長は韓国大使館側の内政干渉に対してかんかんに怒ると同時に、わたくしが韓国大使館にのこのこと出かけたことを批判した。わたくしのところに聞こえてくる話では、日本のさる親韓派国会議員が大学の朝鮮語学科という名称ぐらい自分が韓国語学科と直すよう文部省にかけあうと豪語したらしいが、文部省からわたくしにそんな圧力がかかってきたことは一度もなかった。」（「東京外大朝鮮語学科とわたくし」『百孫朝鮮語学談義 - 菅野裕臣の乱文乱筆』より）

繰り返すが、「朝鮮語」は、一つの民族語である Korean language に南北分断を政治的に持ち込まない日本語での言語呼称である。韓国の国粋主義的ナショナリズムが日本の高等教育に持ち込まれてはならない。私は新潟の大学でも本学でも、日本の高等教育としての主体性を堅持することに細心の注意を怠らなかつた。いや、韓国外国語大学でも、私は日本語の授業では「朝鮮語」と話し続けたし、論文集でも日本語で発表したものには「朝鮮語」と書き続けた。

VI. 韓国からの帰国後

1991年2月11日の夜7時、東京外大の菅野裕臣先生（朝鮮語学）から電話があり、地方の女子短大（県立新潟女子短期大学）でもよかったらポストを紹介できるが、日本に戻ってこないかとの誘いを受けた。日本語教師として韓国に骨を埋める気はなかつたので、大変ありがたく思い帰国することにした。菅野先生は履歴書・研究業績書を郵送するだけでよいと言ったが、すぐに東京外大に行った。まず、菅野先生の紹介で原卓也学長（ロシア文学）にごあいさつした。県立新潟女子短大大学長は、国際教養学科新設のためロシア語・中国語・朝鮮語研究者の紹介を東京外大に依頼していたからだ。その後、故志部昭平先生（当時、千葉大学教授）と3人でお会いした。私の人事は菅野先生が志部先生と相談して決められたとのことだった。志部先生は、かつて私がソウル大学大学院に入学した際、安秉禧（アン・ビョンヒ）教授宛の推薦状を書いてくださった方である。

新潟に赴任する直前、菅野先生は私を東京外大の研究室に呼び、日本の大学で勤めるにあたっての注意事項を私に話した。その時、「君はこれから教育中心で（instructorとして）生きるつもりなのか、研究中心で（researcherとして）生きるつもりなのか」と問われた。返答に窮していると、「教育中心は虚しいよ、研究中心で行きなさい」とおっしゃるのだった。田中克彦先生も、あるとき「語学教師にだけはなるなよ」と私に話したことがあった。私は語学教師の端くれのような仕事に数多く携わってきたが、両先生のおっしゃったことの意味を常にかみしめながら、生きてきたつもりだ。

県立新潟女子短大（現在は新潟県立大学）では、国際教養学科韓国語コースの担当教員となった。島津光夫学長（新潟大学名誉教授、地質学）には公私にわたり、感謝しきれないほどお世話になった。

島津先生は海軍兵学校在学中に敗戦を迎え、九死に一生を得られた。そうした自らの戦争体験を寡黙に振り返りながらお仕事を続けてこられた姿に、私は敬意を抱いてきた。島津先生のような立派な方々も、無数に戦争で亡くなったかと思うと痛ましい。310万人もの戦没者が「戦後日本の発展の礎になった」という、戦争責任逃れの追悼に私は同調できない。敗戦を「終戦」と言いくるめ、さらに「象徴天皇」となることによって戦争責任を米国から見逃してもらった天皇が、「戦没者追悼式」で「英霊」の前に立つありさまは、今後も変わりそうにない。「代替わり」に際し、日嗣の御子が天皇霊を受け継ぐ大嘗祭も「慣例どおり」行われる。明治憲法以来の天皇を頂点とする国体は、無傷なまま「護持」された。これと引き替えに、米国は日本を軍事基地にした。辺野古・普天間基地問題の本質もここにある。

県立新潟女子短期大学は小規模校だったからか、教員間や学生たちとの交流には密なものがあった。特に、島津学長、木佐木哲朗氏（文化人類学）、後藤岩奈氏（中国近現代文学）、城山正幸氏（法律学）、堀江薫氏（法律学）、若月章氏（国際関係論）、高明均氏（朝鮮語学）の諸氏とはしばしば歓談する機会を共にし、私自身啓発されるところが多かった。

新潟では、万景峰（マンギョンボン）号就航何周年かを記念するパーティーに招かれたことがあった。船内では朝鮮の料理や珍しい果実酒もふるまわれ、朝鮮の歌も披露された。私の隣には船長が座っていた。北朝鮮のたばこがほしくなって船長にお願いしたところ、乗組員は私の意に反してセブンスターを持ってきた。朝鮮の煙草がほしいと改めてお願いすると、しばらくして北朝鮮の煙草を持ってきてくれたが、なにかしら微妙なものを感じた。

新潟に赴任して5年が経ったころ、本学関係者から関大に移って来ないかとお誘いを受けた。大阪は父母が暮らす私の故郷でもあり、有難くお受けすることにした。文学部長の浜本隆志先生（関西大学名誉教授、ドイツ文学）が割愛のため新潟までおいで下さり、料亭「鍋茶屋」で故飯田規和学長（ロシア文学）、木佐木哲朗氏と食事を共にしていただいた。浜本先生は千里山キャンパスで朝鮮語が全学共通外国語科目に組み込まれたため、朝鮮語専任教員を採用する

ことになったという経緯も説明して下さった。また、本学で朝鮮語科目を担当なさっていた故梁永厚先生（ヤン・ヨンフ。当時、本学非常勤講師）を新潟にお招きし、日本海に面した瀬波温泉で新潟の同僚たちと楽しい一夜を過ごした。その時、梁永厚先生は朝鮮総連中央にいたころの苦労話もして下さった。こうして離れがたい同僚たちとも別れを告げ、1999年4月に文学部教授として本学に赴任した。

2000年6月13日から20日まで「北東アジア経済協力に関する金森委員会」（代表：金森久雄）に随行して北朝鮮を訪問したとき、私たち訪朝団一行（経済関係者、研究者ら22名）に通訳と保安の任務を持つ2人の男性「案内人」が付き添った。2人ともピョンヤン外国語大学日本語学科を卒業していた。ピョンヤン外国語大学は5年制で、最後の1年は「実習」のために海外に出るが、日本には留学できないので北朝鮮を訪問してくる日本人と会ったりして会話の練習をしたそうだ。会議で貿易部次長が長い話をしたとき、このうちの一人が逐次通訳に立った。原稿なしの実に完璧な通訳だった。彼らの話によれば、当時、各道に1校ずつ6年制外国語学校があり（ピョンヤンのある平安北道だけは2校）、人民学校（現在の「小学校」）卒業後に入学するという。こうした外国語教育に特化した英才教育が日本にもあってよいだろう。「案内人」の2人は、中・高・大で11年間にわたって日本語教育を受けたが、他言語専攻の学生から「日本語をやってもカネにならないのに」と言われたこともあったという。

ピョンヤンでは、あることでお礼が言いたく、金日成総合大学朝鮮語学部の朝鮮語研究者にぜひお会いしたく思っていた。そのため、出発前に北朝鮮での滞在日程を書いた手紙を送っておいた。ピョンヤンに到着して、北朝鮮当局者にその旨を話したところ、「今回の先生の訪朝目的ではないので不可能」と拒否された。翌日、同行の方に相談したところ、明日の会議に社会科学院の方が出てこられるから、その方に相談すればよいとの助言を受けた。翌朝、社会科学院の方に相談をしたところ、その朝鮮語学者をよく知っているということなので、とりあえず持参したお土産のバッグを託した。翌日、この社会科学院の方は、彼の家を知っているからこれからタクシーで行こうと誘ってくれたが、私たち一行に迷惑をかけるかもしれないと思って腰が引け、お断りした。実は、1947年に北朝鮮で発表された金壽卿の論文が読みたくて、アメリカ国立公文書館や議会図書館、ハワイ大学東西センター、中国の延辺大学、吉林大学などを訪問して探しても見つからず、北朝鮮留学経験のあるザッセ氏（Werner Sasse。当時、Bochum大学教授）にもドイツでお会いして尋ねてみたが、がちが明かなかった。

ザッセ氏はフランスで講義をした帰り道に会おうというので、独仏国境の町で待ち合わせた。そこでザッセ氏はワインをしこたま飲んだくせに、車を運転して家に帰って行かれたのには驚かされた。

そこで、ダメ元で金日成総合大学の研究者に手紙を書いたところ、6か月ほどして朝鮮大学校（東京都小平市）の言語学専攻教授から連絡があり、「金大の研究者から論文を預かって来た」という知らせを受けたのだった。この論文は1947年に発表されたもので、北朝鮮における

朝鮮語綴字法改革の嚆矢をなすものだった。この問題については、拙稿「南北朝鮮における言語規範乖離の起点—頭音法則廃棄政策における金寿卿論文の位置—」（『人権問題研究室紀要』第41号、2000年12月）にまとめた。

私をこの代表団に誘ってくださった金己大（キム・ギデ）先生（当時、新潟国際情報大学教授）は4歳のとき（1933年）、慶尚道固城郡からご家族と一緒に来日された。その後、1960年に御家族全員が「帰国事業」で北朝鮮に渡られた。私たちがピョンヤンに到着した翌日だったか、高麗ホテルのロビーの片隅でわずかな時間、ご家族とお会いになっていた。古稀を過ぎた御高齢の金己大先生は、北朝鮮の若い役人の手を両手で握りしめながら、腰が折れてしまうほどに深々と礼をしておられた。怒りと涙なしには見られない光景だった。

北朝鮮滞在中、中朝国境近くの羅津・先峰自由経済貿易地帯を見学した。まず、東海岸にある漁郎（オラン）の軍事空港（北朝鮮には民間空港は一つもない）まで飛行機で行った。ざっと数えて100機ほどのミグ戦闘機が並んでいた。それからチャーターバスで東海岸沿いに北上した。羅津まで50キロの地点の富居里で、道路とクロスした鉄道の踏切で列車が立ち往生していた。電力不足のためだった。それはモスクワからやって来た国際列車だった。私たちのバスはとうもろこし畑の中で1時間ほど立ち往生した。村の子どもたちが遠巻きに私たちを見ていた。その時、私のそばに立っておられた金己大先生が「飴玉でも持ってきていたらなあ」と無念そうにつぶやいた。

その翌日の朝早く、一人でホテルの前にたたずんでいたとき、同行した政府関係者が話しかけてきた。長い間立ち話をしたが、食べ物が足りないので御飯に野菜を混ぜて炊くんですよ、などと厳しい生活を率直に話してくれた。その数年前に多数の餓死者を出した「苦難の行軍」のことだった。私はどこまで踏み込んだ話をしているのか、ずっと迷い続けた。また、バスで隣同士になった「案内人」の一人は、「たとえどんなことがあっても、身を挺してあなたを守ってあげる」と、意味深長なことばをそっとささやいた。北朝鮮の人の素顔を見た気がした。

ピョンヤンに着いた翌日の早朝、高麗ホテルをそっと抜け出し（たつもりで）、ピョンヤン駅まで300ミリの望遠レンズで写真を撮りながら歩いた。36枚を撮り終えフィルムを交換していたとき、後ろから見知らぬ人が、「先生、撮り終えられましたか（선생님, 다 찍으셨습니까?)」と冷たい声で丁寧に話しかけた。そう言われてすぐやめるのも癪だから、あと何枚かピョンヤン駅前でシャッターを切った。羅津では、同行した北朝鮮側の人に制止されながらも、海辺で食事をしていた現地の人をデジカメで撮影した者がいた。弁当を撮りたかったのかもしれない。ホテルに戻り、SDカードの提出を求められた彼は、わざと未使用のカードを渡すという愚かなまねをして、一波乱あった。帰国の2日ほど前だったか、ホテルで案内人と2人きりで酒を飲んでいたら、「本当に申し訳ないが、先生がお撮りになったフィルムを一本だけ提供していただけますか。上のほうの指示なので……」と申し訳なさそうに要求された。翌日手渡されたネガは、1コマだけ切り取られていた。

6月20日の朝10時に離陸予定だったが、当日早朝、1時間予定が早まったと叩き起こされた。プーチン大統領が来るからだ。ピョンヤンの順安空港に向かう途中、チマ・チョゴリを着用し、赤い造花を手にした女性たちが、あちこち群れをなして空港に向かう姿を目にした。私はピョンヤンの書店からあらかじめ購入してあった段ボール2箱分の書籍を持って帰ろうとしたところ、税関で全部開けろと命じられた。ところが、大急ぎで飛行機に乗れという指示が出て、幸いにも荷物はチェックされずにすんだ。滑走路のそばでは、プーチンを迎える通路用に、丸めた赤いじゅうたん状のものを広げる作業が行われていた。

北朝鮮から戻ったあと、私はソウルの慶熙(キョンヒ)大学病院で驚くべき光景を目にした。病院1階ロビーに労働争議中の看護婦たちがぎっしり座り込み、「行く道はけわしくとも、微笑みながら進もう！(가는 길이 험난해도 웃으며 가자!)」とシュプレヒコールを繰り返していたのだ。このスローガンは大量の餓死者を出した1990年代後半期の「苦難の行軍」のスローガンで、ピョンヤンの街角のあちこちに真っ赤な文字で掲げられていたものだ。北朝鮮との地下連携の強さを思わされる。最近(2018年12月27日)、韓国と北朝鮮の両政府は、南北をつなぐ鉄道と道路の着工式を行い、ソウル駅から北朝鮮の板門駅まで、休戦ラインを越えて列車を往復運航させた。既存のインフラのチェックや、工事設計図作りから始めるという。すぐ工事に着工できないのは、北朝鮮に対して経済制裁を加えている最中だからだと、いかにも経済制裁が朝鮮民族にとって迷惑であるかのように韓国のテレビニュースは伝えていた。いまや、朝鮮民族の民族主義は民族の一体化を優先させ、「日米韓」vs.「露中北」という政治的構図に変更をもたらしつつある。経済制裁は食料品や医薬品の逼迫をもたらし、北朝鮮民衆の生命を脅かしている。それが国際的な正義だというのは、あまりにも残酷だ。飽食に慣れた人間たちは、想像力を働かせることを怠り、非「人道」的な生を営んでいるのではないか。人民の命を手玉に取る国際政治に道義的正当性はあるのだろうか。

日本のマスコミは北朝鮮を否定的にしか報道できないことになっているのか、偏向した北朝鮮認識が蔓延する現代日本社会において、私は形態主義をより徹底させた北朝鮮における朝鮮語綴字法改革、民族的要素を大切にする語彙体系の整備、言語分析に徹した北朝鮮の朝鮮語辞典編纂など、少なくとも朝鮮語研究や言語政策に関して公平な立場から南北朝鮮を見なければならぬこと、そして、すべてにおいて南より北が劣っているという硬直した思考は、政治的に情報操作された無知の結果であることを、折に触れて学生たちに語るようにしてきた。

人権問題研究室では、20年間研究員として大変お世話になった。2002年夏には、故梁永厚委嘱研究員らと韓国調査旅行に行った。その時、国立国家記録院に所蔵されている「国語(=日本語)」政策に関する朝鮮総督府行政文書の存在を知り、これをもとに『朝鮮総督府の「国語」政策資料』(関西大学出版部、2004年)をまとめることが出来た。この本は戦争末期、徴兵制を朝鮮でも実施するにあたり、日本語が分かる朝鮮人には朝鮮語使用を禁止した政策を紹介したものである。また、2004年夏には人権問題研究室での調査研究の一環として、鳥井克之教授

(中国語学)と共に北京の中央民族大学や瀋陽の朝鮮族学校などを訪問した。鳥井教授は中国を良く知らない私に瀋陽故宮博物館、九一八記念館、旧奉天大和ホテルにも案内して下さった。これらについては、人権問題研究室『室報』第30号、第34号に調査報告が載せられている。

2007年度には1年間、本学在外研究員として中国に赴いた。これに備えて、2006年度に中国語の授業を、欲張って4クラス聴講させていただいた。さらに、在外研修から帰国後の2008年度も、確か2クラス聴講させていただいた。佐藤晴彦先生(神戸市外国語大学名誉教授)の授業は厳しく、誠心誠意教えられる姿勢に感銘を受けた。いきなり第一声の「マー」を極めて高い音程の大声で発せられたときは、みな度肝を抜かれた。ちょっとでも雑談をした受講生がいたら、「君、立ちなさい。そこを読みなさい」と厳しい声で命じ、「雑談はダメ」などという野暮なことは一切おっしやられなかった。延辺朝鮮語に対する中国語からの語彙干渉との関連で「儿(兒)化」のことをお尋ねしたら、その翌週、中国で出版された「儿(兒)化」した語を集めた分厚い語彙集をお貸し下さった。奥村佳代子先生(外国語学部教授)にも無理を言って受講させていただいた。「三字経」も紹介されたりして、大変興味深かった。「三字経」を読みたいと思い中国から買って帰ったが、そのうちにと思いつつまだ読めていない。長谷部剛先生(文学部教授)の授業では、中国の時事問題もビデオを用いながら授業に取り入れ、学生の興味を掻き立てるものだった。90分の授業時間の配分を見事に考慮して進められた授業だった。范(範)紫江先生の授業では、その温かなお人柄ゆえに教室は和やかな雰囲気にも包まれていた。帰国後は日下恒夫先生(本学名誉教授)御担当の文学部中文専攻2年生の授業も聴講させていただいた。日下先生の学生に対する姿勢は、他には類例を見出しがたいほどあけすけで厳しくもあり、またユーモアに溢れていた。ありがたいことに、沈国威先生(外国語学部教授)からは『中国語辞典』(白水社)を贈呈していただいた。非常に優れた辞書でしばしば利用させていただいている。

在外研究では客座研究員(客員研究員)の資格で中朝国境にある延辺大学に滞在したが、3、4か月間ほどは中国各地を旅行した。少数民族が多数居住する辺境地域を回るようにしたが、血圧等の健康管理に自信が持てず、チベット自治区にはついぞ足を踏み入れる勇気が持てなかった。

私は1999年4月に本学に赴任してから20年間、安定した研究環境のもとで人間関係にも恵まれながら勤務できたのは、私の人生にとってたいへん幸せなことだった。関西大学への移籍話があった時、実は某国立大学からも移籍して来ないかとの強い誘いを受けていた。しかし、20年間の勤務を振り返り、関西大学を選んで本当によかったと思っている。

おわりに

本学はマンモス校だけあって、私のように重要な役職から縁遠い者は、一日中研究室に潜んでいてもさしたる支障が生じることもなかった。こうして一人孤独な時間をたっぷり持てたの

は、実にありがたいことだった。また、同僚の高明均教授や多くの優れた非常勤講師との間で、大きないさかいごともなく過ごせたのは、得がたい幸せだった。

最後の2年間ほどは、退職した後なるべく後悔することがないように、学生たちに伝えたいことを歯に衣を着せないで話そうと思って講義に臨んだ。この準備のために、多くの文献や資料を読んだ。学部の講義「言語と社会 (アジア)」「エリアスタディーズ (アジア)」や大学院の講義では、朝鮮総督府の「皇国臣民化」教育、美濃部達吉の天皇機関説排撃事件、天皇制の諸問題、「国体」論、教育勅語、大嘗祭などを批判的に論じた。戦前から引き継がれた天皇制の思想こそが、日本の民主主義を損ねる最大の難問であると考えからである。

2年前、スタディー・アブロードで韓国留学を終えた学生対象の授業で行った小テストで、朝鮮語の文章を翻訳させたとき、4人の学生全員が朝鮮文字で表記された「日帝」(日帝)という漢字語の意味が分からず訳せなかったのは驚いた。これでは韓国人とまともな議論などできるわけもない。韓国留学で一体何を見て来たのかと、嘆かわしくなった。

外国語の習得が「おべんきょう」の域を出ない状況は、なんとしても打開されなければならないと切実に思う。先に紹介したNHKの荻野吉和氏は、かつて朝鮮語ができる人材を採用しようと思い、大阪外大朝鮮語学科に卒業見込み学生の紹介を依頼し、面接試験を実施した。面接試験で、応募してきたその学生に、ヤマト政権とも関係が深かった古代国家群の「伽倻」について質問したところ、「カヤ、カヤ？」と首をかしげるだけだったという。荻野氏は君の後輩のことで申し訳ないが、こんな人間は使い物にならないから採用しなかったと話した。これは視野の狭い「語学馬鹿」は、まともに相手にされない一例である。

中国の外国語大学から、退職後でよいから教員として来ないかという、ありがたいお誘いも受けた。しかし、私は慣れない異郷の地で、新たな試行錯誤で老境の身を鞭打つより、最後は故郷で自らを見つめながら暮らす方が良いと思っている。

よく「棺を蓋^{おほ}いて事定まる」というが、私はまだ蓋をされたくない。長生きを望むだけでなく、これまで納得できるような仕事を、何一つ成し遂げていないからだ。だから、「これからは晴耕雨読を……」などと悠長なことをいうつもりはさらさらしない。老後の生活不安をよそに、金銭的には大した価値もないが自分にとっては大切な本のために、古マンションを2つも買い足したのはそのためだ。

最後に、現職から身を引くものとして、朝鮮語の教育研究が更なる発展を遂げることを願いつつ、筆を置く。(2019年3月4日)